

仙台市文化財調査報告書第30集

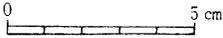
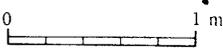
山田上ノ台遺跡

—発掘調査概報—

昭和56年3月

仙台市教育委員会
本間物産株式会社

山田上ノ台遺跡一発掘調査概報一正誤表

頁	行・図・表	誤	正
8	下, 1	しまりがある。	シルト質粘土。しまりがある。
15	上, 3	石刃	ポイント, 石刃
15	下, 6	剝片	スクレイパー, 剝片
20	第5図		
23	上, 16	珪代	珪化
45	上, 9	他に例がなく,	他に例が数少なく,
48	7	No. 2	No. 27
48	8	No. 6, 8	No. 15, 16
48	9	石器	No. 1 石器

仙台市文化財調査報告書第30集

山田上ノ台遺跡

—発掘調査概報—

昭和56年3月

仙台市教育委員会
本間物産株式会社

序

名取川北岸流域一帯は、市内でも遺跡の多いところとして周知されています。特に縄文時代の遺跡の宝庫ともいわれ、四大縄文遺跡（三神峯・山田上ノ台・上野・人來田）もこの地域に集中しています。また、沖積地といわれているところは縄文時代の遺跡は考えられないとされていた通説を覆した六反田、山口遺跡も笹川流域にあって各学徒の注目をあびた遺跡であります。

近年、この流域一帯も市街化の影響を受け宅地化が急激に進展しています。これに伴って埋蔵文化財の包蔵地にかかる開発行為も増加の一途をたどっています。本書も宅地造成工事計画に係る発掘調査の成果を公表するものであります。この山田上ノ台遺跡は古くから周知された規模の大きい縄文時代の遺跡でこれまで一度も調査されたことはなく、今回初めて解明されるにいたったものであります。

今回の調査結果は予想を大きく超え、人類の起源にまで遡る前期旧石器時代の遺跡をも包含する一大複合遺跡であることが明らかにされるなど学界に大きな波紋を投げかける重要な遺跡となりました。

本書は、その成果を取りあえず速報的にまとめ公表するものであります。前期旧石器の発見によって、今後名取川流域に分布する遺跡群が学問的に新しい観点から注目視せざるを得ない段階に入ったことを意味します。

そう云う意味からも本小報告が多くの学兄や市民各位に活用され、今後の文化財保護行政の発展に多くの御意見、御助言・協力を賜われますれば大変幸せに存じます。

昭和56年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤 井 黎

例 言

1. 本書は、仙台市山田字上ノ台に所在する山田上ノ台遺跡発掘調査概報である。
2. 調査期間：昭和55年4月10日～昭和56年1月13日
3. 調査主体：仙台市教育委員会
4. 調査担当：仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係
5. 調査面積：約10000㎡（遺構確認面積約4000㎡）
6. 担当職員：佐藤 洋・渡部弘美・主浜光朗・柳沢みどり・佐藤甲二・篠原信彦・結城慎一
金森安孝・斎野裕彦
7. 調査協力：本間物産株式会社・東北大学文学部考古学研究室・宮城県教育庁文化財保護課
東北歴史資料館・石器文化談話会
8. 調査指導：伊東信雄（仙台市文化財保護委員・東北学院大学文学部教授）、芹沢長介（東北
大学文学部教授）、岡村道雄（東北歴史資料館技師）、鎌田俊昭（石器文化談話会）
9. 調査に際して、庄子貞雄・山田一郎（土壌学）、中川久夫・竹内貞子（地質学）、豊島正幸・
板垣直俊（地理学）諸氏の御教授をいただいた。
10. 本書第1図は国土地理院発行の2.5万分の1の地形図（仙台西南部）を使用したものである。
11. 土層の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人・日本色彩研究所色票監修
の「新版標準土色帖」を使用した。
12. 本書に掲載した石器・礫の肉眼による石質鑑定は、仙台市科学館・佐々木隆氏による。
13. 本書の作成に際して、岡村道雄、鎌田俊昭、豊島正幸、東北大学文学部考古学研究室院生
・学生、横田慶一諸氏の御協力をうけた。
14. 本文の執筆分担は次のとおりである。
渡部 弘美……Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ－1・Ⅴ－4
主浜 光朗……Ⅴ－3・Ⅵ
柳沢みどり……Ⅳ・Ⅴ－2・Ⅵ
15. 本書に掲載した遺構・遺物の図面作製は渡部・主浜・柳沢が行なった。
16. 本書に掲載した写真は遺構を佐藤・渡部・主浜、遺物を渡部が撮影した。
17. 本書の編集は渡部・主浜が行なった。

本文目次

I. 調査に至る経過	1
II. 遺跡の位置と環境	1
1. 自然的環境	1
2. 歴史的環境	1
III. 調査の方法と経過	3
IV. 基本層序	7
V. 調査の概要	10
1. 調査概要	10
2. 旧石器時代	12
(1) 調査経過	12
(2) 発掘調査結果	13
(3) 各層の微起伏調査	18
(4) 旧石器の年代	20
3. 縄文時代	32
(1) 縄文時代の住居跡	32
(2) 縄文時代の土壌	37
(3) 遺物包含層	41
4. 平安時代	42
(1) 平安時代の住居跡	42
(2) 平安時代の土壌	44
VI. まとめと今後の課題	45

図表・図版目次

第1図 遺跡の位置	2	第8図 W-19区第6文化層	15
第2図 遺跡周辺地形図	4	第9図 W-19区第7層化層	16
第3図 遺構配置図	5・6	第10図 U-18区第7文化層	16
第4図 基本層序模式図	7	第11図 W-19区第8文化層	17
第5図 W-19区西壁断面図	14	第12図 W-19区第9文化層	17
第6図 U-18区西壁断面図	14	第13図 旧石器調査区及び ハンドオーガー調査地点	19
第7図 W-19区南壁断面図	14		

第14図	北西—南東ライン土層柱状図…………… 20	第3表	N—21住居跡土層観察表…………… 34
第15図	北—南ライン土層柱状図…………… 20	第4表	N—21住居跡ピット観察表…………… 34
第16図	西—東ライン土層柱状図…………… 21	第5表	N—21住居跡出土土器註記表…………… 35
第17図	第5・6・7・8層上面 出土石器…………… 25	第6表	O—24住居跡土層観察表…………… 36
第18図	第9・21・22・23層上面 出土石器…………… 26	第7表	O—24住居跡ピット観察表…………… 36
第19図	第24層上面・第21層中出土石器… 27	第8表	O—24住居跡出土土器註記表…………… 37
第20図	第21—27間層上面出土石器…………… 28	第9表	土壌分類表…………… 38
第21図	第21—27間層上面出土石器…………… 29	第10表	S—18 a 土壌出土土器註記表…………… 40
第22図	第27層上面・第29層上面 出土石器…………… 30	第11表	S—18 a 土壌出土土器註記表…………… 40
第23図	第29層上面・第31層中出土石器… 31	第12表	T—32住居跡土層観察表…………… 43
第24図	N—21住居跡実測図…………… 33	第13表	T—32住居跡出土土器註記表…………… 44
第25図	N—21住居跡出土土器実測図…………… 35	図版1・2	遺跡遠影…………… 46
第26図	O—24住居跡実測図…………… 36	図版3～5	旧石器発掘区土層断面…………… 47
第27図	O—24住居跡出土土器拓影図…………… 37	図版6～9	旧石器出土状況…………… 48
第28図	P—21 d 土壌実測図…………… 38	図版10～20	縄文時代の住居跡…………… 49
第29図	Z—17 a 土壌実測図…………… 38	図版21～28	縄文時代の土壌…………… 53
第30図	K—28土壌実測図…………… 39	図版29	平安時代の住居跡…………… 55
第31図	S—18 a 土壌実測図…………… 39	図版30	平安時代の土壌…………… 56
第32図	L—22 e 土壌実測図…………… 40	図版31	東区谷部発掘状況…………… 56
第33図	N—26 a 土壌実測図…………… 40	図版32	東側道路部…………… 56
第34図	S—18 a 土壌出土遺物拓影図・ 実測図…………… 40	図版33	第5・6・7・8・9・21層 上面出土石器…………… 57
第35図	S—18 a 土壌出土土器実測図…………… 41	図版34	第21・22・23・24層上面出土石器…………… 58
第36図	T—32住居跡実測図…………… 43	図版35	第21層中・第24・ 21—27間層上面出土石器…………… 59
第37図	T—32住居跡出土土器実測図…………… 44	図版36	第21—27間層・ 第27層上面出土石器…………… 60
第38図	L—25 a 土壌実測図…………… 44	図版37	第29層上面・ 第31層中出土石器…………… 61
第1表	U18・W19区の第1～9 文化層出土土器属性観察表…………… 23	図版38	出土縄文土器…………… 62
第2表	U18・W19区の第6～9 文化層出土礫石質鑑定表…………… 24	図版39	出土縄文土器・土製品・石器… 63
		図版40	出土石器…………… 64
		図版41	出土石器・土師器・柄鏡…………… 65

I. 調査に至る経過

仙台市西部に位置する山田地区周辺は、近年仙台のベッドタウンとしての発展が著しく、急速に宅地化が進んでいる地域といえる。その中であって、山田上ノ台遺跡は畑地としての現状を保ち良好な保存状態にあった。昭和54年、本間物産株式会社により当遺跡地内に宅地造成計画が立案され、提出された開発行為事前協議書にもとづき、仙台市教育委員会は開発者との協議を行なった。その結果、開発申請予定地内の埋蔵文化財の保護に必要な措置を検討することを目的とした試掘調査を実施することになった。

試掘調査は開発予定地内に6×3mのトレンチを計12ヶ所設定し遺構確認を行なった。その結果、台地上の各地域に住居跡・土壙・ピット・溝が分布しており、縄文時代から平安時代にかけての遺跡であることが確認された。

試掘調査によって明らかにされた資料にもとづき再度協議の結果、開発部分の事前調査を行なうこととなり、昭和55年4月10日より記録保存を目的とした調査を実施した。

II. 遺跡の位置と環境

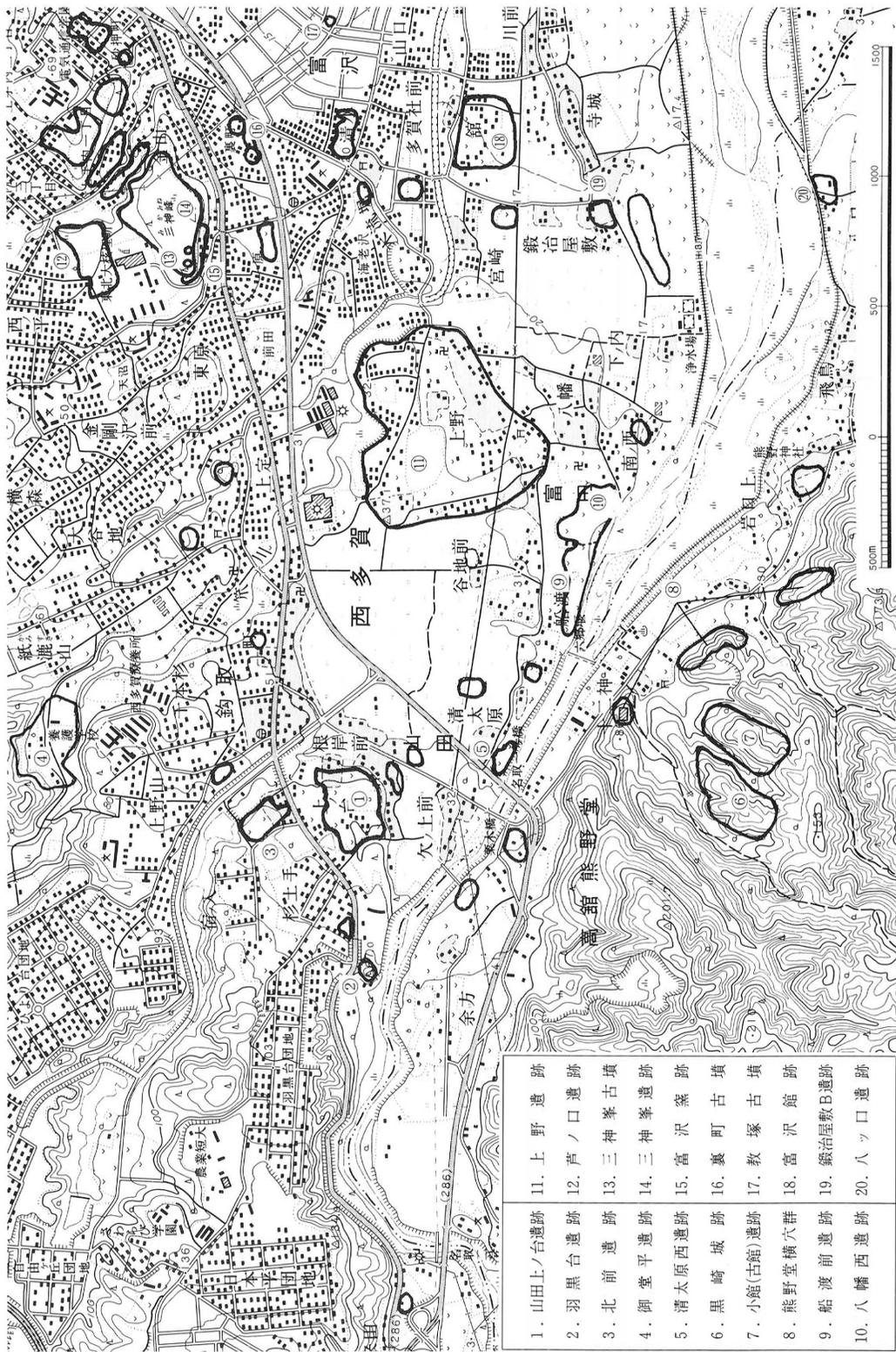
1. 自然的環境

山田上ノ台遺跡は、東北本線長町駅より西方約5km、仙台市山田字上ノ台2外に所在している。本遺跡の周辺地形は、北側に青葉山丘陵が西から東へ向かって延び、南側には高館丘陵が位置している。両丘陵間を名取川が東流しており、扇状地性沖積地を周辺に形成せしめ、太平洋に注いでいる。

遺跡は青葉山丘陵が南側へ舌状に張り出す小丘陵の先端部、段丘礫層を基盤とする標高50m程の台地に位置している。この舌状台地上には約35,000㎡の平坦地があり、東側には深い谷が西側には浅い谷がはしり、台地を区画している。東側の谷及び名取川周辺は水田地帯となっており、台地上周辺は畑地となっている。

2. 歴史的環境

仙台平野を東に望む本遺跡周辺は、北側に丘陵地帯、南側に丘陵地帯と河川、東側には耕地地帯が位置しており数多くの遺跡が分布している。旧石器時代の遺跡は周辺では青葉山丘陵に位置する青葉山遺跡などがあるが、縄文時代になると大規模な遺跡が形成されはじめる。上野遺跡・三神峯遺跡などがあり、上野遺跡は段丘に位置する約30万㎡の範囲をもつ大規模なものである。昭和51年に発掘調査が行なわれ、縄文時代中期の住居跡等が確認されている。弥生時代になると沖積地の自然堤防上に遺跡が形成されはじめるが、周辺では船渡前遺跡がある。



第1図 遺跡の位置

1. 山田上ノ台遺跡	11. 上野遺跡
2. 黒黒台遺跡	12. 声ノ口遺跡
3. 北前遺跡	13. 三神峯古墳
4. 御堂平遺跡	14. 三神峯遺跡
5. 清太原西遺跡	15. 富沢窯跡
6. 黒崎城跡	16. 裏町古墳
7. 小館(古館)遺跡	17. 教塚古墳
8. 熊野堂竈穴群	18. 富沢館跡
9. 船渡前遺跡	19. 鍛冶屋敷B遺跡
10. 八幡西遺跡	20. ハッソ口遺跡

古墳・平安時代以降になると遺跡数も増加し多様性がみられる。古墳では裏町古墳・三神峯古墳がみられ、平安時代としては八幡西遺跡がある。

このように山田上ノ台遺跡の周辺には各時代にわたる遺跡がみられ、仙台市西部の遺跡群をかたちづくっている。

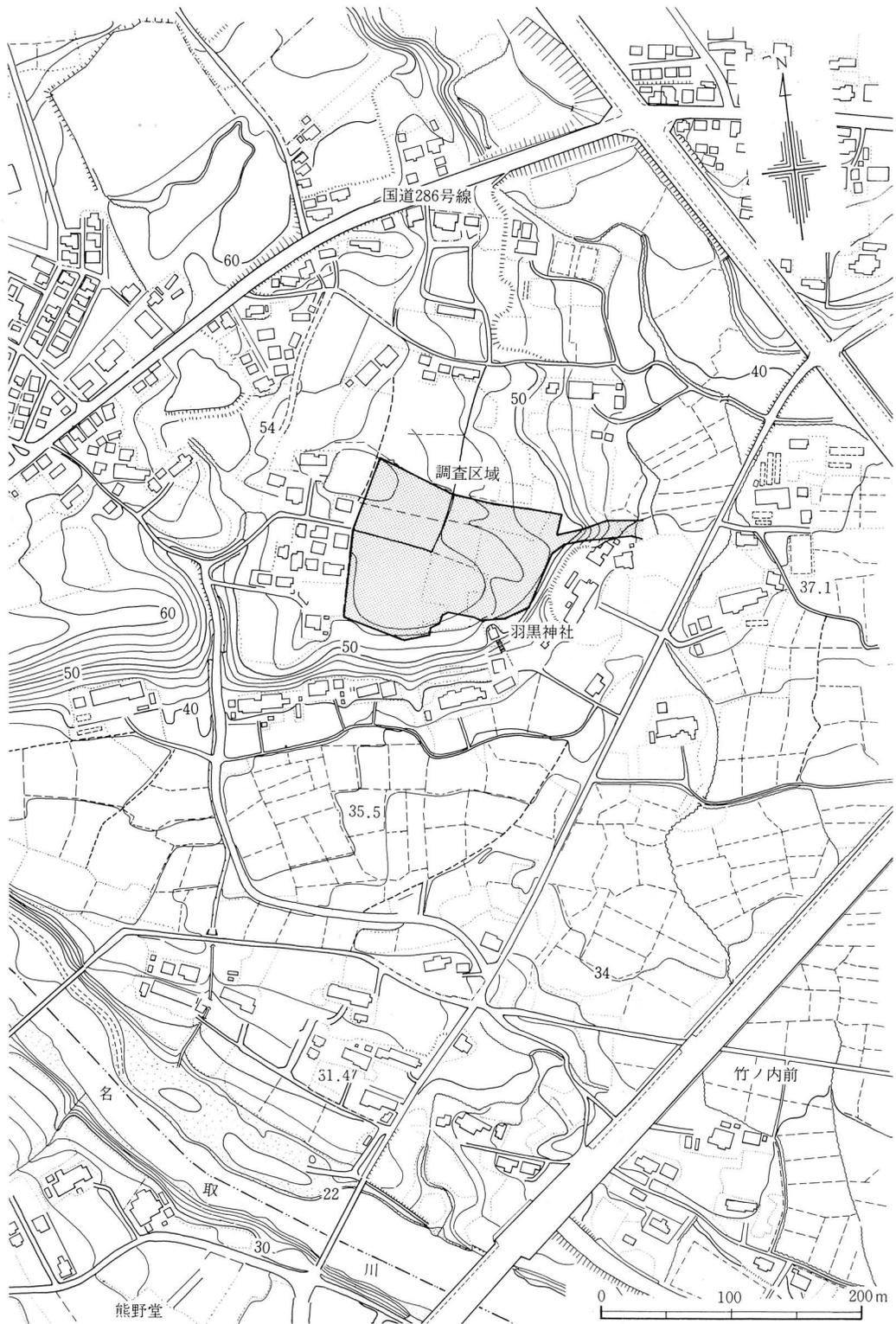
Ⅲ．調査の方法と経過

山田上ノ台遺跡の範囲は台地上の平坦面約35000㎡である。今回、提出された開発予定地範囲は遺跡南面約16000㎡であった。調査は昭和54年に実施した試掘調査の結果より、全面発掘を実施することになった。

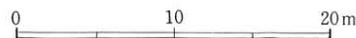
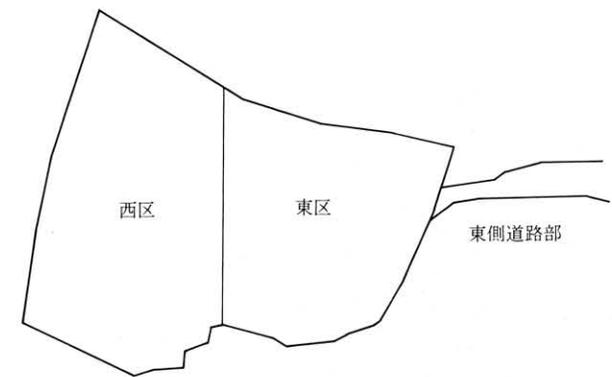
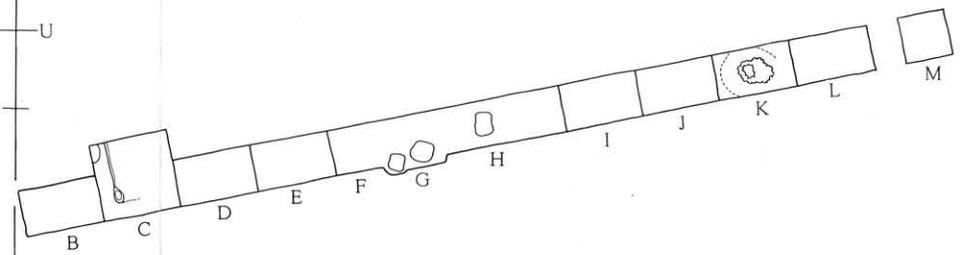
調査の方法として、磁北を縦軸とする5mを単位としたグリッドを開発予定地に設定した。グリッド名は南北軸にアルファベット文字・東西軸に算用数字を用いた名称を使用し、検出した遺構名はグリッド名を頭に付した名称を用い、グリッド名を呼称しえない遺構については通し番号を用いた。調査区内は広範囲にわたるため、便宜的に東区・西区・東側道路部と三地区に分けて調査を行なうことにした。

調査は4月10日より東区から開始した。表土層は全面を重機で排除し、後、遺構確認を北西部より実施し、順次北東部・南東部・南西部へと進めた。その結果、広範囲に分布する遺構を確認した。特に東区南半においては縄文時代の住居跡・土壙が密集しており、大規模な集落跡の様相がうかがわれた。5月下旬より、東側道路部の調査も併行して行なうことになり、地形にあわせて3×5mのトレンチを設定し調査を行なった。その結果、急傾斜な地形ではあるが平安時代の住居跡・江戸時代の墓壙・近代の井戸跡を確認した。9月6日に調査の中間報告として現地説明会を開催した。8月下旬の頃よりローム層中より石器が検出されはじめ、旧石器文化層の存在が予想されたため、部分的に試掘調査を行なった結果、旧石器時代の文化層を確認した。又、その後の調査で遺跡の基盤である段丘礫層より上位の層から石器が発見され、前期旧石器の存在をも考えるに至り、従来の調査体制とは別に旧石器調査の体制を整え、10月13日より後期旧石器・前期旧石器の確認調査を開始した。調査はU-18区・W-19区を中心に行ない、後期旧石器・前期旧石器時代の文化層を確認した。11月22日に第2回目の現地説明会を開催した。旧石器調査は12月13日に終了した。

これらの調査結果が明らかになるにつれて、遺跡保存の問題が起り、仙台市は遺跡保存の立場で開発側との話し合いを進めていった。このことから、東区では埋設土器等の取り上げは最小限度にとどめ、遺構と共に保存することとし、細部にわたる精査は残すことにした。西区の調査は西区南半の遺構確認のみを実施した。前述の方法を用い調査は1月13日に終了した。



第2図 遺跡周辺地形図



第3図 遺構配置図

IV. 基本層序

調査区内において、第1層から第33層（段丘礫層）まで確認された。

第1層 厚さ10～40cm。ほとんどが草木根や耕作によって攪乱されているが、全体的な土色は暗褐色（10Y R 3/4）である。縄文時代・平安時代の遺物を含む。

第2層 厚さ10～20cm。暗褐色（10Y R 3/4）。シルト質でしまりは少ない。少量のローム粒を含む。東区西側では遺物包含層の構成層となり、多量の縄文時代の遺物を含む。第2層上面で確認された遺構がある。

第3層 厚さ10～20cm。にぶい黄褐色（10Y R 5/3）。シルト質でしまりは少ない。炭化物、ローム粒を含む。第2層同様東区西側では遺物包含層の構成層となっている。

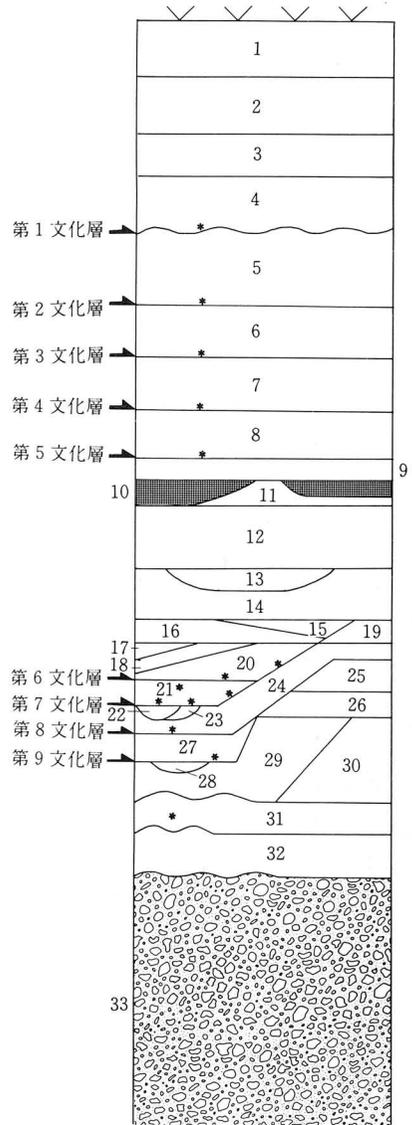
第4層 厚さ約10～20cm。にぶい黄褐色（10Y R 5/6）。火山灰層への漸移層。しまりはなく、粘性に乏しい。旧石器時代、縄文時代早期・前期の遺物を含む。

第5層 厚さ10～20cm。黄褐色（10Y R 5/6）。軟質火山灰層。しまりはあまりない。上面はやや起伏している。直径2～3cmの硬いローム塊を部分的に含む。旧石器時代の遺物を包含する。

第6層 厚さ約10～20cm。黄褐色（10Y R 5/6）～明黄褐色（10Y R 6/6）。軟質火山灰層。しまりはややある。直径2～3cmの硬いローム塊を多く含む。旧石器時代の遺物を包含する。

第7層 厚さ約10～20cm。明黄褐色（10Y R 6/6）。硬質火山灰層。しまりはある。直径2～3cmのローム塊を密に含む。直径1～2mmの砂粒を含む。旧石器時代の遺物を包含する。

第8層 厚さ約10～20cm。明黄褐色（10Y R 6/6）。硬質火山灰層。しまりはある。直径1～2mmの砂粒を



* 石器

第4図 基本層序模式図

含む。旧石器時代の遺物を包含する。N23区で顕著に見られるが、他の発掘区では明瞭でない。

第9層 厚さ約5～10cm。明黄褐色（10YR $\frac{5}{8}$ ）。硬質火山灰層。しまりはある。直径2mmの白色粒（長石？）や第10層起源のスコリア粒を含む。旧石器時代の遺物を包含する。

第10層 厚さ約0～13cm。橙色（5YR $\frac{7}{8}$ ）。直径3mm以下の赤褐色スコリア粒を含む軽石質火山灰や、暗黄褐色の砂状の粗粒火山灰層である。この層は「川崎スコリア層」を含む固結部に相当し、その噴出年代は¹⁴C年代測定によって、31,500 \pm 2,610年B.P.（TH-365）から26,240 \pm 1,360年B.P.（TH-309）の間の時期とされている（板垣ほか、1981）。

第11層 厚さ約0～5cm。暗赤褐色（7.5YR $\frac{3}{8}$ ）。やや軟質の火山灰層。粘性があり、土性は均一である。

第12層 厚さ約5～15cm。黄褐色（10YR $\frac{5}{6}$ ）。やや硬質の火山灰質層。しまりはある。粘性はあまりない。少量のマンガン粒や直径1mm以下の白色粒、少量の石英粒を含む。黄褐色の砂粒を多く含む。

第13層 厚さ約0～15cm。褐色（10YR $\frac{4}{6}$ ）シルト質粘土。しまりはないが、粘性がある。多量のマンガン粒や、黄褐色の砂、少量の石英粒を含む。部分的にマンガン粒の集積が見られる。

第14層 厚さ約8～18cm。黄褐色（10YR $\frac{5}{6}$ ）。やや硬質の火山灰質層。しまりがあり、粘性もある。マンガン粒や黄褐色の砂粒を多量に含む。直径1mm以下の白色粒や、極少量の石英粒を含む。

第15層 厚さ約0～5cm。褐色（10YR $\frac{4}{6}$ ）。シルト質粘土。しまりがある。粘性は第14層に比べて弱い。多量のマンガン粒や、石英粒、風化したパミス粒を含む。

第16層 厚さ約5～10cm。明黄褐色（10YR $\frac{5}{6}$ ）。シルト質粘土。しまりはあるが、粘性は弱い。マンガン粒や石英粒、多量の風化したパミス粒を含む。黄褐色の砂を多量に含む。第15層と第16層は層相がきわめて類似しており、同一起源の層と扱えられる可能性がある。

第17層 厚さ約0～8cm。明黄褐色（10YR $\frac{5}{6}$ ）。シルト質粘土。しまりがあり、粘性はやや強い。マンガン粒、白色粒、石英粒を含む。黄褐色の砂も含むが、第16層ほど多くはない。

第18層 厚さ約0～10cm。明黄褐色（10YR $\frac{5}{6}$ ）。シルト質粘土。しまりはあり粘性は弱い。マンガン粒、白色粒、石英粒や風化したパミス粒を多量に含む。

第19層 厚さ約0～5cm。明褐色（10YR $\frac{5}{6}$ ）。シルト。しまりはある。粘性は弱い。石英粒と若干のマンガン粒を含む。第17層起源のシルト質粘土をブロック状に含む。

第20層 厚さ約0～8cm。明黄褐色（10YR $\frac{7}{6}$ ）。粘土。しまりはあまりない。少量のマンガン粒を含む。白色粒と石英粒をやや多く含む。風化したパミス粒を含むが、第18層に比べ少ない。

第21層 厚さ約0～15cm。にぶい黄橙色（10YR $\frac{8}{4}$ ）を基調とし、明褐色（2.5YR $\frac{5}{6}$ ）を斑点状に含む。しまりがある。マンガン粒や白色粒を含む。旧石器時代の遺物を包含する。

第22層 厚さ約0～5cm。にぶい黄橙色(10YR $\frac{7}{3}$)を基調とし、明褐色(10YR $\frac{6}{6}$)を斑点状に含む。粘土。しまりはある。マンガン粒と白色粒をわずかに含む。第21層に層相が類似するが、第22層の色調がより明度が高い点で異なる。旧石器時代の遺物を包含する。

第23層 厚さ0～5cm。黄褐色(10YR $\frac{5}{6}$)。砂。しまりや粘性はない。多量の石英粒や少量のマンガン粒、赤い粒子を含む。直径4～5mmの小礫を含む。旧石器時代の遺物を包含する。

第24層 厚さ0～10cm。明黄褐色(10YR $\frac{5}{8}$)。シルト。しまりはややある。粘性はない。多量の石英粒を含む。部分的に青灰色粘土をブロック状に含む。旧石器時代の遺物を包含する。

第25層 厚さ0～10cm。明黄褐色(2.5Y $\frac{7}{6}$)で一部灰白色(5Y $\frac{1}{2}$)を呈す。シルト。しまりがあり粘性はない。マンガン粒、石英粒、直径2～3cmの礫を多く含む。

第26層 厚さ0～10cm。明黄褐色(10YR $\frac{7}{6}$)のシルトを基調とし、浅黄色(5Y $\frac{7}{4}$)の砂粒を含む。第25層に比べ色調は白っぽい。しまりは強く、粘性はない。石英粒を多量に含む。径2～3cmの小円礫を多く含む。

第27層 厚さ0～8cm。黄褐色(10YR $\frac{5}{6}$)。砂。しまりや粘性はない。部分的にマンガン粒が沈着する。直径2～3cmの小礫を含む。旧石器時代の遺物を包含する。

第28層 厚さ0～5cm。明黄褐色(10YR $\frac{5}{8}$)。粘土。しまりや粘性がある。少量のマンガン粒や石英粒を含む。部分的に青灰色の粘土を含む。

第29層 厚さ0～25cm。浅黄色(2.5Y $\frac{7}{4}$)のシルトを基調とし、灰白色(5Y $\frac{1}{2}$)の粘土を含む。南東部ではマンガン粒を比較的多く含み黒味を帯び、北西隅では酸化鉄の沈着を見、赤味を帯びる。しまりはある。石英粒を少量含む。風化した直径3cmの小円礫を含む。部分的に砂粒を多く含む部分がある。旧石器時代の遺物を包含する。

第30層 厚さ0～40cm。橙色(7.5YR $\frac{6}{8}$)を基調とし、灰白色(10YR $\frac{5}{6}$)を含む。シルト。第29層より赤味をおびる。層相は第29層に近似する。風化した小円礫を含む。下部に小円礫を多量に含む部分がある。一部に橙色と灰白色とが互層になっている。

第31層 厚さ約10cm。橙色(5R $\frac{6}{6}$)の粘土を基調とし、明黄褐色(2.5Y $\frac{5}{6}$)のシルトを含む。土性は緻密で粘性が強くしまりがある。マンガン粒は含まない。第29層や第30層とは層相が明確に区別される。旧石器時代の遺物を包含する。

第32層 厚さ約5～10cm。浅黄色(2.5Y $\frac{7}{4}$)のシルトを基調とし、マンガン粒、明黄褐色シルトを斑点状に含む。しまりがある。下部に段丘礫層の浮き上がりである風化した小円礫を含む。

第33層(段丘礫層)直径5～30cmのほとんど中心まで風化した円礫である。礫間を、淡黄色(2.5Y $\frac{5}{6}$)粘土と明褐色(7.5YR $\frac{5}{6}$)粘土が斑点状に埋めている。

小 括

1. 各層の成因

第5層から第11層までの層は、降下火山灰層である。なおまれに小亜円礫や小円礫を含むことから、地表流の影響が認められる。

第12層から第32層のうち、第12層と第14層は火山灰質であり、その色調から風化帯の可能性がある。第29層以下の層は背後の支谷から流水により運搬堆積されたものであり、その上をおおう第28層から第15層の薄い各層は、支谷からの運搬堆積が弱まる過程で地表流の影響をも受けながら堆積されたものと考えられる。

2. 火山灰の対比

第10層が永野火山灰の基底部に近い層準にあたる(中川、他 1960、1961、板垣、他 1981)ことから、第9層以上の層は永野火山灰に対比されると考えられる。第10層より下位の火山灰については、平沢火山灰あるいは愛島火山灰に対比される可能性があるものの、現在のところ不明である。

V. 調査の概要

1. 調査概要

東区と東側道路部の調査では、前期旧石器時代・後期旧石器時代の文化層、縄文時代の竪穴式住居跡・土壙、平安時代の竪穴式住居跡・土壙、掘立柱建物跡、ピット群、溝、近世の墓壇近代の井戸跡が確認された。これらの遺構は広範囲に分布しており、特に東区南側に密集している。

旧石器時代の調査は東区北西部を中心に実施した。計200㎡程の調査を行ない、遺跡の基盤となっている段丘礫層まで調査を進め、前期旧石器時代の文化層4枚、後期旧石器時代の文化層5枚を確認した。

縄文時代の遺構は住居跡21軒、土壙200余基を確認した。住居跡は全て東区南半部に位置し、台地南辺部を東西に広がる様に分布している。住居跡相互の位置関係より3ブロック以上の地区大別が考えられる。住居跡はほとんど円形プランを呈し、径4m程のものが大半を占めるが径6mを計る大形の住居跡もみられる。住居跡には炉が確認されており全て複式炉である。複式炉内の埋設土器は全て大木10式であった。敷石住居が2軒確認されている。土壙は東区全域に分布している。平面プランは円形を呈するものが大半を占め、径1～2m程のものがほとんどである。平面・断面の形態から5類に大別することができる。

平安時代の遺構は住居跡4軒・土壇7基を確認した。住居跡は東区中央部・東部・北東部・東側道路部と散在している。4軒の住居跡とも隅丸方形のプランを呈し、一辺4m内外の規模の小さなものである。土壇は東区に点在している。平面形は円形や楕円形を呈し、規模は大形のもので径2m程、小形のもので径60cm程である。炭化物・焼土を多量に検出したものがある。

掘立柱建物跡は3棟確認した。ピット類が東区全域に密集して分布しており、さらに多くの建物跡が発見される可能性がある。確認した建物跡は方向・規模に統一性はみられなかった。柱穴からの出土遺物はほとんどなく時期は不明である。

溝は東区全域にわたり21条確認した。ほとんどの溝は調査区外へ延びており性格・時期と不明な点が多いが、東区東側では溝が二重にまわる方形状の遺構が確認されている。

墓壇は東側道路部の中央部に3基確認された。方形と円形の掘り方が確認された。副葬品として煙管・クシ・柄鏡が出土している。墓標等から江戸時代中期のものであることが確認された。

井戸跡は東側道路部東側で1基確認した。径4m程の円形の掘り方をもつ石積みの井戸である。曲物・ヒシヤク・電球が出土し、近代のものであることを確認した。

その他確認できたものとして、東区北側部と東側部の二地点で遺物包含層を確認した。縄文時代中期の遺物を包含している。

西区の調査は遺構確認のみを行ない、南側南辺部を東西に広がる様に分布する大形の円形の落ち込みを12箇所、石組を4箇所、西区に散在するように小形の円形の落ち込みを20箇所、西区東側から西側の調査区外へ延びる広範囲にわたる落ち込みを1箇所確認した。これらはそれぞれ、住居跡・土壇・遺物包含層と考えられる。

今回の調査で出土した遺物は縄文時代中期を中心として多量にのぼる。未整理の状態であるので詳細は不明である。

旧石器時代の遺物は前期旧石器・後期旧石器を合わせて計200点程出土している。器種として、前期旧石器ではチョッピングツール・楕円形石器・ポイント・剥片などがあり、後期旧石器では石斧・スクレイパー・石刃・剥片・石核などが出土した。

縄文時代の遺物は縄文時代早期から後期のもので確認されており、中期の土器が大半を占めている。器種は深鉢・浅鉢・壺などがあり、石器類では石鏃・石匙・石斧・石錐・磨石・敲石・石皿などがある。

平安時代の遺物ではロクロ土師器坏・甕、須恵器坏・甕、円面硯の脚が出土している。

2. 旧石器時代

(1) 調査経過

8月下旬から9月上旬にかけて、縄文時代以後の遺構壁面や風倒木痕等から断片的に旧石器が発見され、旧石器時代文化層の存在が予測された。そこでN23区、R17区、S21区、S・T19区、S・T17区、V・W18区（第13図）を設定し、9月8日から調査を開始した。一部不整形なトレンチを設定せざるを得なかったのは、縄文時代以後の遺構が未調査であったことによる。

R17区、S・T19区、S・T17区、V・W18区は第4層から第6層上面まで調査したが、第5層上面、第6層上面から石器が出土した。S21区は第6層から第7層上面まで調査したが、石器は出土しなかった。N23区は第4層から第9層上面まで調査したが、第5層上面、第6層上面、第7層上面、第8層上面、第9層上面から石器が出土した。

以上の調査結果の報道関係への発表を9月30日に予定していたが、当日、U18区のほぼ全域を占めていた風倒木痕の地表下約1.5mの底面、およびW19区に北東部に位置していた縄文時代の土壌壁面から、各1点ずつ旧石器が発見された。これらはいずれも約二万数千年前から約三万数千年前の年代が与えられている川崎スコリア層をはるかに下回る層準に帰属していたため、前期旧石器に属するものと判断された。

当市ではこの重要性にかんがみ、東北大学文学部芹沢長介教授に調査指導を依頼するとともに、宮城県教育庁文化財保護課、東北歴史資料館、東北大学文学部考古学研究室、石器文化談話会に協力を依頼し、10月13日からU18区、W19区の二地区の調査を開始した。U18区では第5層上面、第6層上面、第7層上面から後期旧石器が出土した。前期旧石器は11月15日から両地区で出土し始めた。U18区では第21層中、第21—27間層上面から出土した。W19区では第21層上面、第22層上面、第23層上面、第24層上面、第27層上面、第29層上面、第31層中から出土した。

上記の調査と併行して、12月9日から調査区各層の微起伏を把握するため、ハンドオーガーを用いて調査を行った。

12月13日に旧石器に関する全ての調査を終了した。

12月16日には現地で、発掘調査の資料に基づく、考古学、地質学、土壌学、地理学の各分野の研究者による山田上ノ台遺跡の遺跡検討会を実施した。

なお、調査中には関係諸分野の研究者の助言を適宜得、調査の参考とした。

(2) 発掘調査結果

1. 発掘区の層序

今報告ではU18区とW19区の層序に限定して述べる(第5～7図)。層名は基本層序に基づく。

W19区西壁の層序(第5図)の特徴

1. 段丘礫層上面は北から南へ緩やかに傾斜しており、礫層上面の起伏は殆ど認められない。
2. 第30層が北寄りに厚く、南に傾斜しながら、しだいに薄く堆積している。
3. 第29層が第30層の傾斜面にやや厚く堆積している。
4. 第30層および第29層と第14層の間を10枚の薄い層が埋めている。

U18区西壁の層序(第6図)の特徴

1. 段丘礫層上面は南から北へやや傾斜している。
2. 段丘礫層上面から第27層までの各層の起伏が激しい。
3. 第21～27間層以上の層はほぼ安定した堆積状況を示している。
4. 第21層と第27層の間を第21～27間層としたのは、これらの土層の一部が基本層の第22～26層の一部の層に対応していることと、W19区の第22～26層の傾斜の延長上で最も低い位置にあることから、第22～26層の再堆積層である可能性があるのをこのように記載した。この層の層相は次のとおりである。

明黄褐色(10YR $\frac{8}{2}$)の粘土を基層とし、明黄褐色(10YR $\frac{6}{2}$)シルト質粘土、砂質シルト、浅黄色(5YR $\frac{7}{2}$)シルトがレンズ状に入り込んでいる。全体にマンガン粒、石英粒を含む。

W19区南壁の層序(第7図)の特徴

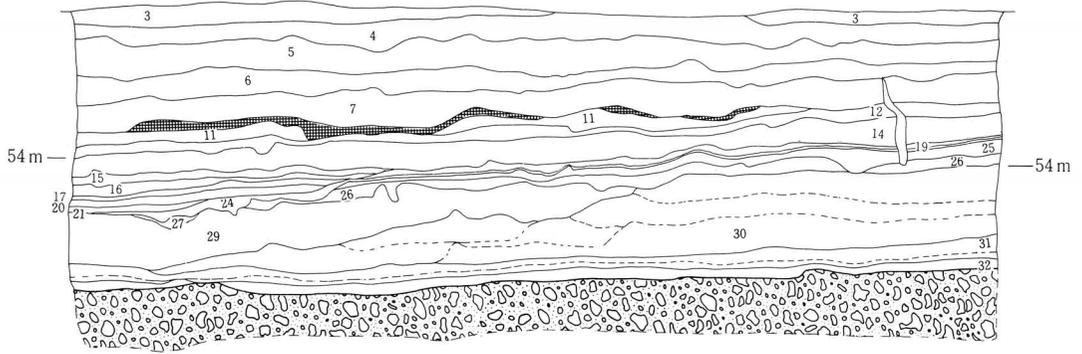
1. 礫層上面は東から西へ傾斜している。第32層から第10層の各層は、この傾斜にそって平行に傾斜している。
2. 第29層が東に薄く、西に厚く堆積している。

2. 遺物出土状況

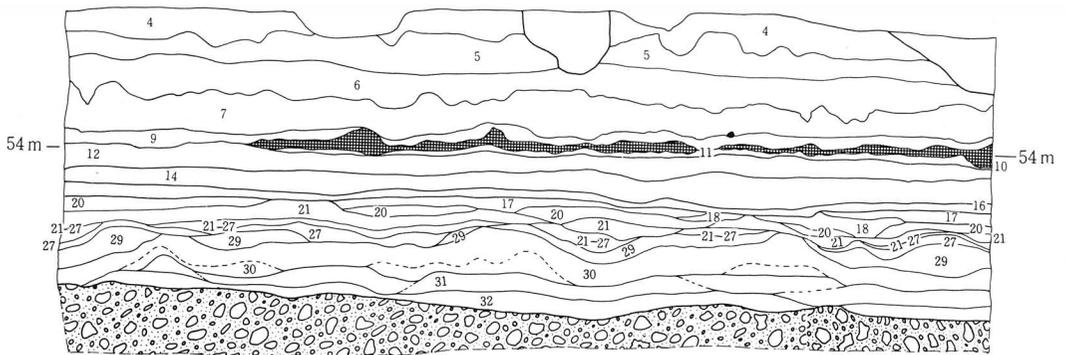
個々の遺物の属性観察結果は第1表でまとめて扱う。

第1文化層(第5層上面)

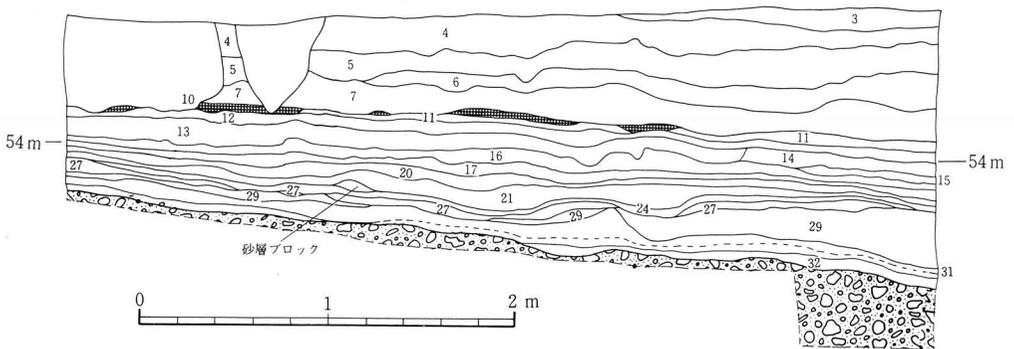
R17区、S・T19区、S・T17区、V・W18区、U18区で、尖頭器、石刃、石核、チップが総計30数点出土した。散漫な出土状況を示す。



第5図 W-19区西壁断面図



第6図 U-18区西壁断面図



第7図 W-19区南壁断面図

第2文化層（第6層上面）

N23区、R17区、S・T19区、S・S17区、V・W18区、U18区で、ナイフ形石器(?)、石斧、スクレイパー、石刃、剥片、チップが総計70数点出土した。石器は、S・T17区の南寄りとV・W18区の中央からやや西寄りとに、平面形が3×2mの楕円形状のまとまった出土状況を示す。

第3文化層（第7層上面）

N23区とU18区で総計6点出土した。石核、剥片、チップがある。

第4文化層（第8層上面）

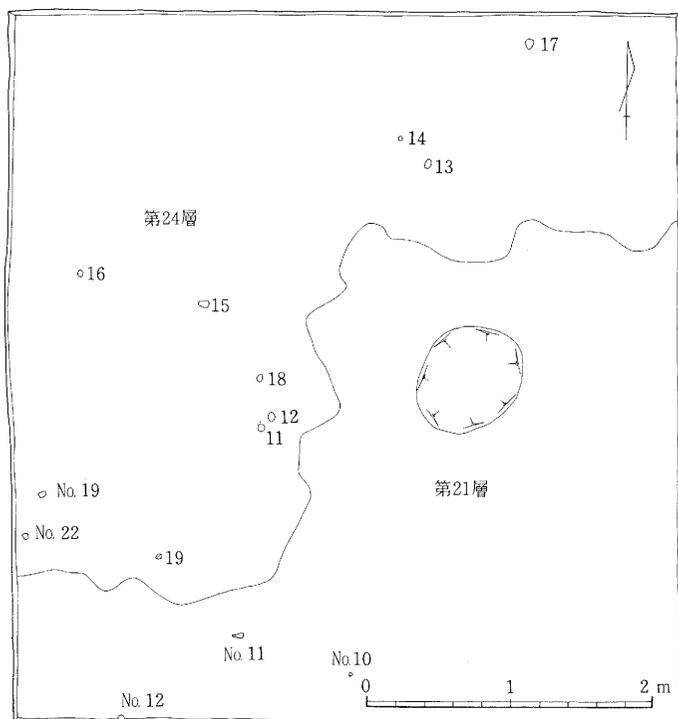
N23区で石斧が1点出土した。

第5文化層（第9層上面）

N23区で剥片が3点出土した。

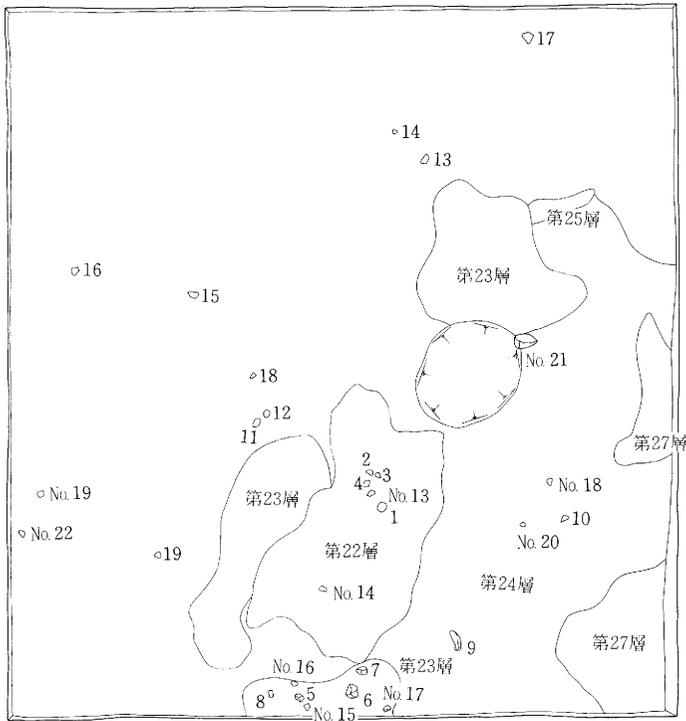
第6文化層（第21層上面、第24層上面の一部）

W19区で確認した。第20層を掘り上げた段階で、区の北西半分は24層が、南東半分は21層が分布した。この面は北及び北東方向から石器が分布する南西方向へ緩やかに傾斜している。その高低差は約35cmである。No.19、No.22の石器は第24層上面から出土し、No.10、No.11、No.12の石器は第21層上面から出土した（第8図）。

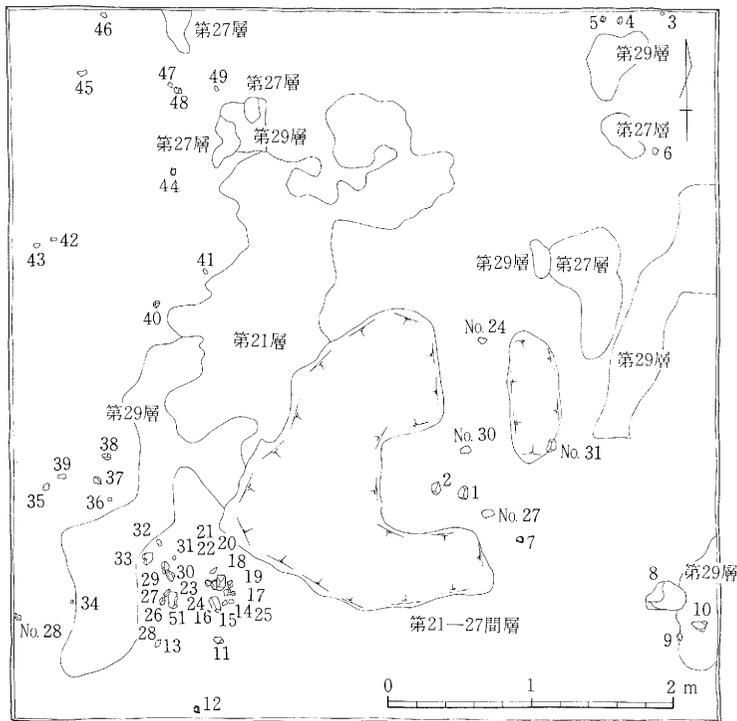


第8図 W-19区第6文化層

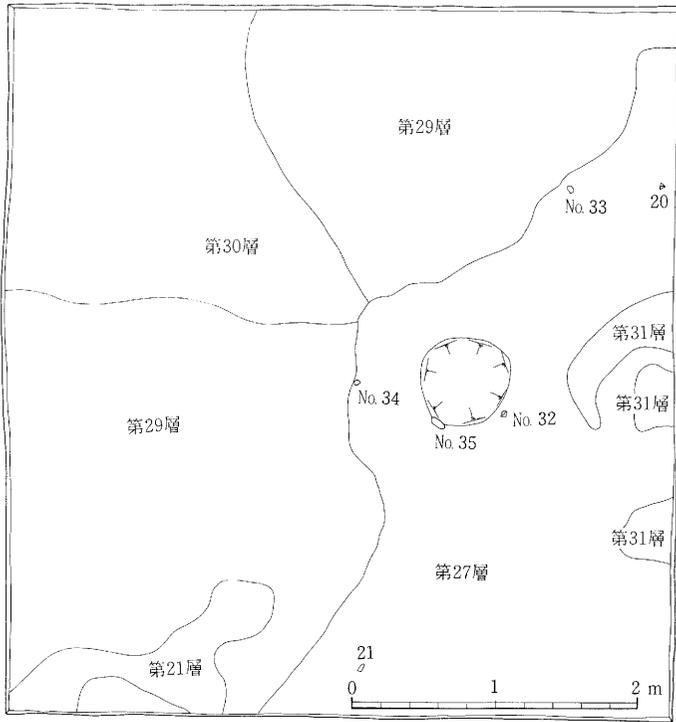
註) 石器はNo付番号で、
礫は素番号で示した。



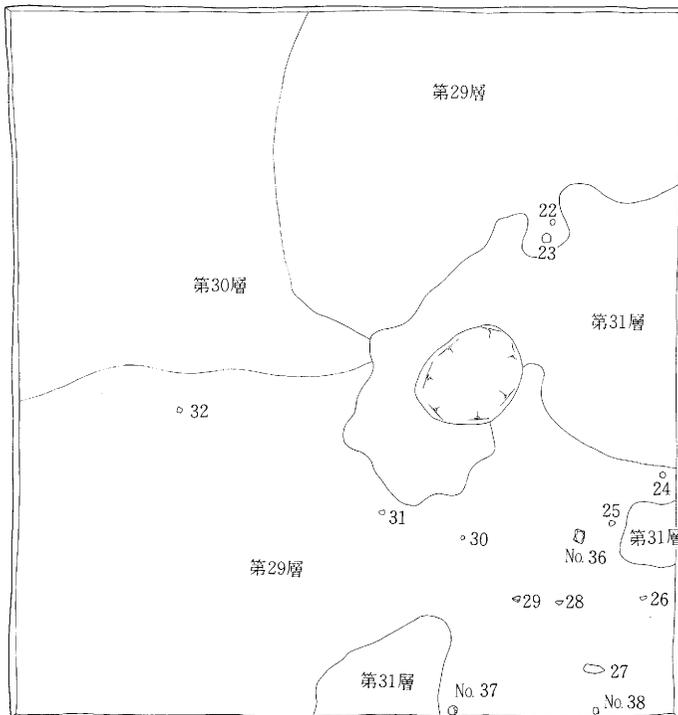
第9图 W-19区第7文化層



第10图 U-18区第7文化層



第11図 W-19区第8文化層



第12図 W-19区第9文化層

第7文化層（第22層上面、第23層上面、第24層上面の一部、第21—27間層上面）

W19区とU18区で確認した。

W19区では第21層を掘り上げた段階で、区の全面に24層が広がり、北東と南西を結ぶ部分に第22層、第23層が分布した。この面は北西方向から北東と南西を結ぶ部分に向って緩やかに傾斜し、再び東及び北東方向に高くなっている。前者の高低差は約30cm、後者は約20cmである。No.13、No.14の石器は第22層上面、No.15、No.16、No.17の石器は第23層上面から、No.18、No.20、No.21の石器は第24層上面から出土した(第9図)。No.19、No.22の石器は第6文化層にも含めて記載してあるが、それは今回の調査範囲で、これらの石器の帰属文化層を結論づける十分な資料が得られなかったことによる。

U18区では第21層を掘り上げた段階で、第21—27間層がほぼ全面に分布した。No.24、No.27、No.28、No.30、No.31の石器がこの層の上面から出土した。No.28を除く石器は区の中央からやや南東寄りにまとまって出土した(第10図)。

第8文化層（第27層上面）

W19区で確認した。第24層を掘り上げた段階で、区の北西半分に第29層、第30層が、南東半分に第27層が分布する。東寄りには第31層が見え出している。この面は区の北及び南東から南西に向って緩やかに傾斜している。No.32、No.33、No.34、No.35の石器が第27層上面から出土した(第11図)。

第9文化層（第29層上面）

W19区で確認した。第27層を掘り上げた段階で、区の北西部に第30層、北西部と南半部に第29層が分布する。No.36、No.37、No.38の石器が第29層上面から出土した(第12図)。

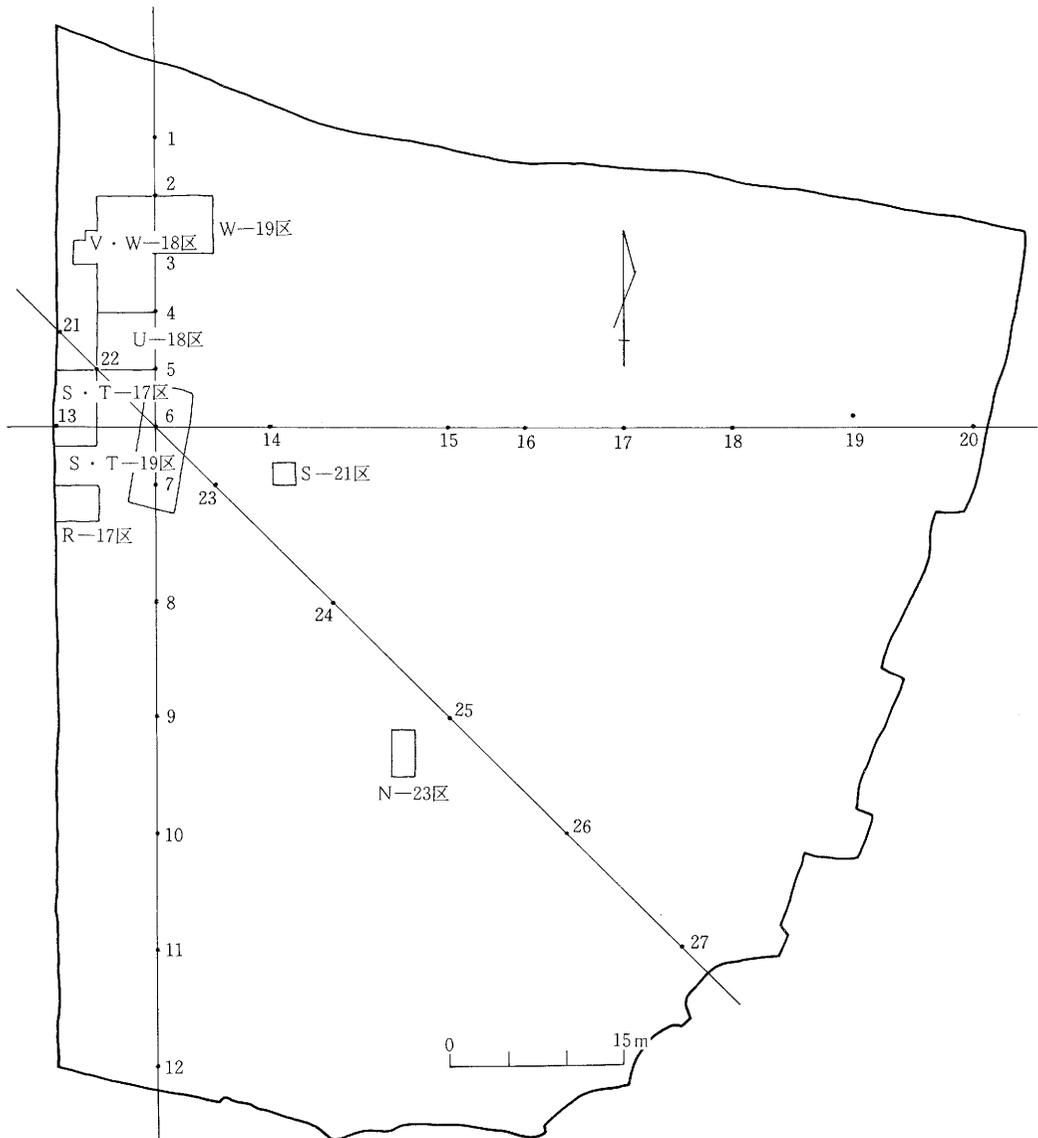
(3) 各層の微起伏調査

第1層から第33層の各層理面および段丘礫層面の微起伏を把握することを目的に、次の方法で行った。

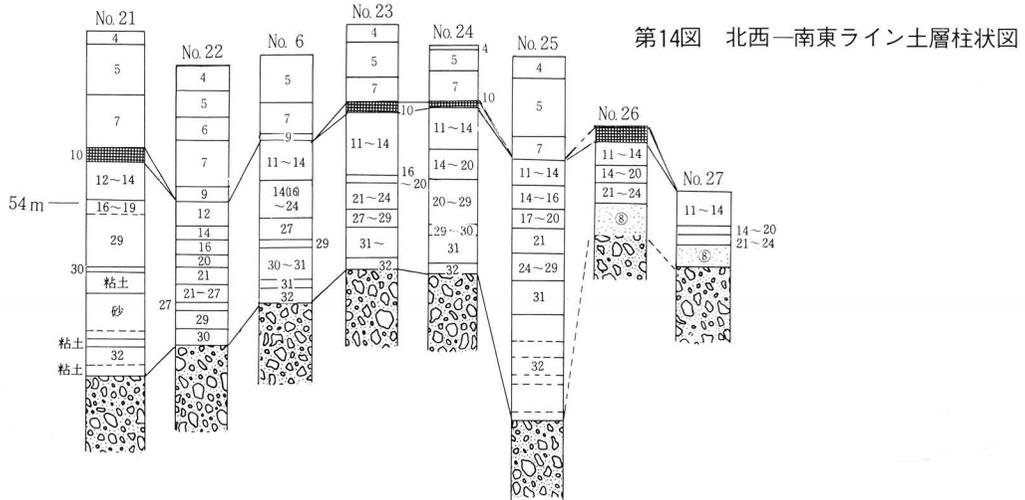
調査手段として、刃先の直径10cmのポストホール型ハンドオーガーを用いた。台地を横断・縦断するように、東—西・南—北・北西—南東と3本のラインを設定し、その線上の22地点を調査した。第13図はその調査結果である。No.2・3・4・5・22の土層柱状図は、U18区とW19区の発掘調査による層序である。試料の分析は基本層序に基づいたが、それに該当しない層には新たに番号を付し註記した。ハンドオーガーによって採集される試料は、刃先によって“乱した層”であることから細かい基本層との対比は困難であるが、特に10層および段丘礫層上面は特徴的な層相を持つことから、非常に有効であった。

調査結果から次のことが明らかとなった。

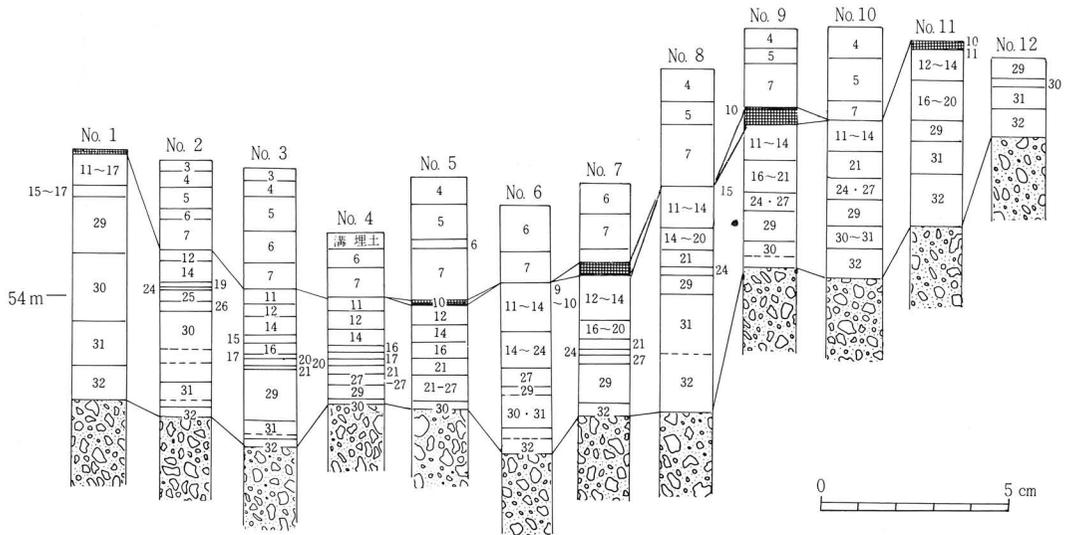
1. 段丘礫層上面は巨視的に見てほぼ平坦である。しいて言えば、調査区の南半部と北西部がやや高く、U18区・W19区近辺がほんの少し低くなっている。さらに調査区中央よりやや北寄りの西方部から東方部に向かってしだいに低くなっている。
2. 第10層は段丘礫層面の微起伏とほぼ同じように堆積している。



第13図 旧石器調査区及びハンドオーガー調査地点



第14図 北西—南東ライン土層柱状図



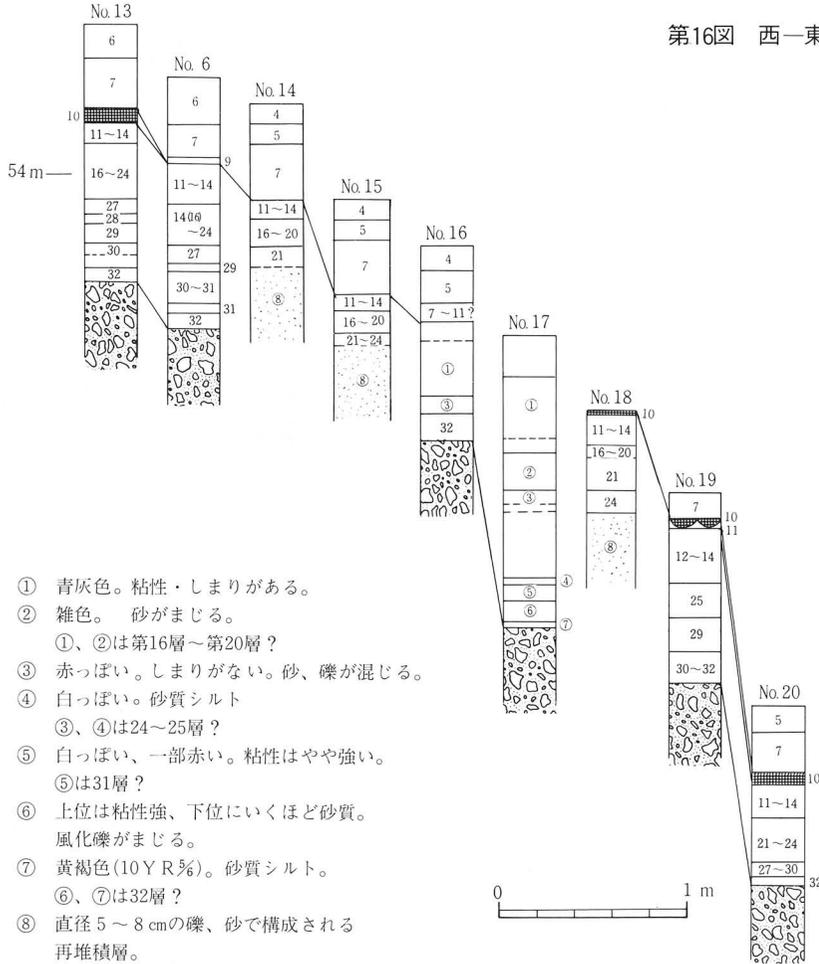
第15図 北—南ライン土層柱状図

(4) 旧石器の年代

今回の調査では、火山灰層中に第1～9の文化層が確認されたが、第6～9の文化層には約2.5～3.5万年前をさらに遡る年代が与えられた。3万年前を遡る文化の存在について諸説があるがここでは芹沢氏の時代区分（芹沢 1962）、に従って述べる。

第1～4の文化層は後期旧石器時代に属するものである。今から約3万年前後の年代が与えられる第5文化層出土の石器は剥片3点にすぎないが、それらの形態には次の特徴がある。第1に長さに対し幅が広い。第2に打角がやや大きく、背面に自然面を残すものがある。将来こ

第16図 西一東ライン土層柱状図



の時期の資料が豊富になれば、この石器の所属時代は自ずと決定されよう。第6～9の文化層は前期旧石器時代に属する。石器はいずれも粘土、シルト質粘土、シルト、砂層の層理面及び一部層中から出土した。石器と併出した礫とは明確に区別される。というのは、石器の石材は多様で、多くが礫と一致せず、礫は流水で搬入された円礫、亜円礫、風化の著しい円礫であるからである。また、各層の微起伏調査から礫が自然の営力で破碎されることも考えられない。石器の出土量は総計30点ときわめて少ないが、次の特徴がある。石器の内容から第6～8の文化層出土石器と、第9文化層出土石器と二群に分けられる。前者には、背面の一部に自然面を残す剥片、剥片素材のポイント、礫および剥片素材のチョッピング・ツール、スクレイパー、チップ、石核、節理面を残した礫・礫片を素材にした二次加工がある石器などがある。それらには交互剝離技術や両極剝離技法がみられる。後者には二次加工がある石器、剥片と礫片素材の大形で重量のある楕円形石器がある。前者は断片的に報告されている中部ローム中に包含さ

れていたという石器群に類似し、後者は早水台遺跡出土の石器に類似している。

これらの石器の年代を問題にする時、この段丘礫層の形成時期がかかわってくるが、この段丘礫層に関して現在二つの考え方がある。即ちこれを上町段丘の段丘礫層（田山 1933、中川他 1960、1961）とするものと台ノ原段丘の段丘礫層とするもの（中田他1976）とである。中川（1961）によると、上町段丘は関東地方の武蔵野段丘面に対比され、台ノ原段丘は下末吉段丘面に対比されている。町田・鈴木（1971）によれば、下末吉段丘面の形成時期はフィッシュン・トラックの年代測定により 12～13万年前とされ、また、杉原他（1972）や町田・鈴木（1971）にもとづけば、武蔵野段丘面の形成時期は 5～10万年前と考えられている。今後山田上ノ台の段丘礫層の堆積時期が決定されれば、前期旧石器の年代も出土層準の位置からそれに近い年代が与えられることが予想される。

引用・参考文献

- 相沢忠洋 1969 『岩宿の発見』
- 板垣直俊・豊島正幸・寺戸恒夫 1981 「仙台およびその周辺地域に分布する洪積世末期のスコリア層」『東北地理』33巻1号。P. 48～53
- 杉原重夫・高原勇夫・細野衛 1972 「武蔵野台地における関東ローム層と地形面区分についての諸問題」『第四紀研究』第11巻第1号。P. 29～39
- 芹沢長介 1962 「旧石器時代の諸問題」『日本歴史』P. 77～107.
- 芹沢長介 1965 「大分県早水台における前期旧石器の研究」『日本文化研究報告』1。P. 1～119
- 田山利三郎 1933 「北上山地の地形学的研究 其一 A. 仙台近傍の河岸段丘」『斎藤報恩会学術研究報告第17号』P. 1～83
- 中川久夫 1961 「本邦太平洋沿岸地方における海水準静的変化と第四紀編年」『東北大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告』第54号。P. 1～59
- 中川久夫・小川貞子・鈴木養身 1960 「仙台付近の第四系および地形(1)」『第四紀研究』第1巻第6号。P. 219～227
- 中川久夫・相馬寛吉・石田琢二・竹内(小川)貞子 1961 「仙台付近の第四系および地形(2)」『第四紀研究』第2巻第1号。P. 30～39
- 中田高・大槻憲四郎・今泉俊文 1976 「仙台平野西縁・長町一利府線に沿う新期地殻変動」『東北地理』第28巻第2号。P. 111～121
- 町田洋・鈴木正男 1971 「火山灰の絶対年代と第四紀後期の編年—フィッシュン・トラック法による試み—」『科学』第41巻。P. 263～270

第1表 U18区・W19区の第1～9文化層出土石器属性観察表

番号	区	層位	アイールド番号	標高(m)	器種	素材	打面	長×幅×厚(cm)	備考	石材	備考	重量(g)	図版番号
No.1	V18	5層上面	16	54.58	ポイント			5.65×3.60×1.80	破損後調整	珪質頁岩	石英安山岩が珪化した	34.0	第17図
No.2	V18	6層上面	18	54.48	ポイント			2.50×2.60×0.68	破損	珪質頁岩		4.1	第17図
No.3	R17	6層上面	9	54.97	スクレイパー(?)	石刃		6.97×2.00×1.00	破損一破損面に二次加工がある 最末端が中央部にある 鋭細な鋭縁がある	珪質頁岩		16.0	第17図
No.4	N23	6層上面	3	54.39	剥片		平坦	6.04×4.30×1.54		細粒砂岩		29.6	第17図
No.5	N23	7層上面	8	54.27	剥片		平坦	3.10×1.84×0.96		珪質頁岩		5.4	第17図
No.6	N23	8層上面	11	54.17	石斧	銅片片		8.90×4.65×2.60	片面が自然面	珪質頁岩		85.1	第17図
No.7	N23	9層上面	14	54.60	スクレイパー	剥片	平坦	3.90×4.14×1.04	一部破損	珪質頁岩		18.0	第18図
No.8	N23	9層上面	13	54.64	剥片		平坦	4.00×4.65×1.20	最末端が鋭縁がある 片面が自然面	珪質頁岩		19.7	第18図
No.9	N23	9層上面	12	54.63	スクレイパー	剥片	自然面	4.20×5.46×1.08	片面が自然面 自然面が最端の二部にある	珪質頁岩	原岩は凝灰岩か?	21.2	第18図
No.10	W19	21層上面	257	53.84	二次加工がある剥片		自然面	1.00×1.17×0.30	背面が自然面	珪質頁岩		0.37	第18図
No.11	W19	21層上面	256	53.79	二次加工がある礫片	礫片		6.90×3.14×2.06	板状の角礫を素材にしている	安山岩		38.2	第18図
No.12	W19	21層上面	255	53.78	スクレイパー	剥片	自然面	4.90×4.36×1.40	一部破損	珪質頁岩		28.6	第18図
No.13	W19	22層上面	262	53.84	剥片		調整	5.28×3.94×0.98	最端が鋭縁がある 鋭細な鋭縁がある	珪質頁岩		16.4	第18図
No.14	W19	22層上面	263	53.79	スクレイパー(?)	剥片	平坦	4.58×2.78×0.96	一部破損、自然面が側面にある	凝灰岩	珪化を受けている	9.4	第18図
No.15	W19	23層上面	261	53.75	剥片		平坦	4.00×4.44×1.13	やや風化している、新しい破損	珪質頁岩	安山岩の珪晶が、溶融して 全体が珪代を受けた	15.1	第18図
No.16	W19	23層上面	268	53.72	剥片		欠	4.12×4.18×0.56	一部破損	珪質頁岩		9.2	第18図
No.17	W19	23層上面	264	53.81	スクレイパー	剥片	平坦	4.30×2.72×1.20		珪質頁岩		15.8	第18図
No.18	W19	24層上面	259	53.89	スクレイパー+ポイント	剥片	平坦	3.37×3.98×0.82	背面は両極鋭離か?	珪質頁岩		12.23	第19図
No.19	W19	24層上面	253	53.84	二次加工がある剥片	礫片		5.76×2.88×1.54	板状の角礫を素材にしている	安山岩		24.3	第19図
No.20	W19	24層上面	260	53.89	ポイント	剥片	平坦	3.50×2.98×0.56		珪質頁岩		4.9	第19図
No.21	W19	24層上面	1	53.76	チョッピング・トゥール	礫片		10.44×6.90×4.40		安山岩(?)		261.6	第19図
No.22	W19	24層上面	265	53.82	スクレイパー	剥片	自然面	4.62×3.78×0.56		珪質頁岩		11.4	第19図
No.23	U18	21層中	134	53.55	スクレイパー(?)	剥片		4.14×3.28×1.40	一部破損	流紋岩	珪化している	17.9	第19図
No.24	U18	21層上面	8	53.47	ポイント	剥片	欠	3.80×2.65×1.17		同定不可能	火山岩?	11.7	第20図
No.25	U18	風洞木炭層	4	53.47	ポイント	剥片		4.10×3.68×1.34	板状の角礫を素材にしている	火山岩	安山岩又は玄武岩	20.9	第20図
No.26	U18	風洞木炭層	7	53.45	ポイント	礫片		4.26×3.47×1.40	板状の角礫を素材にしている	安山岩		48.8	第20図
No.27	U18	21層上面	1	53.56	チョッピング・トゥール	扁平礫片		5.46×7.00×3.00	両面に二部自然面がある 交互鋭離がほぼ空面を占める	珪質頁岩	凝灰岩が弱い珪化を受けた	103.4	第20図
No.28	U18	21層上面	135	53.48	チョッピング・トゥール	剥片		3.20×6.20×1.50		珪質頁岩		30.5	第20図
No.29	U18	風洞木炭層	4		キヨロド・ズラトイバー+ チョッピング・トゥール	剥片		3.90×6.20×2.50	両面に自然面がある 交互鋭離が認められる	安山岩		48.8	第21図
No.30	U18	21層上面	6	53.48	チョッピング・トゥール	礫片		5.20×6.90×2.88	鋭細な鋭縁が多少ある 鋭細な鋭縁が多少ある	流紋岩	珪晶が黒曜 岩が珪晶と同等なのは黒曜 岩が珪晶と同等なのは黒曜 岩が珪晶と同等なのは黒曜 岩が珪晶と同等なのは黒曜	121.8	第21図
No.31	U18	21層上面	24	53.38	石核			7.00×7.07×4.66	剥離作業面は一面である	玄武岩?	安山岩又は玄武岩	227.6	第21図
No.32	W19	27層上面	273	53.81	チョッピング・トゥール	礫片		2.9×4.14×1.70	角礫を素材にしている	安山岩		18.7	第22図
No.33	W19	27層上面	286	53.89	ポイント	剥片		2.07×1.70×0.50		珪質頁岩		2.1	第22図
No.34	W19	27層上面	272	53.74	二次加工がある剥片	平坦		3.07×2.10×1.00		珪質頁岩		6.4	第22図
No.35	W19	27層上面	2	53.75	チョップパー	礫片		11.60×6.60×4.90	板状の角礫を素材にしている	安山岩		315.9	第22図
No.36	W19	28層上面	270	53.82	楕円形石器	剥片	平坦	8.70×7.48×3.30	典型的な交互鋭離が認められる	流紋岩		225.4	第22図
No.37	W19	28層上面	271	53.77	楕円形石器	扁平礫片		6.65×8.80×3.30		緑色凝灰岩		191.6	第23図
No.38	W19	28層上面	276	53.87	二次加工がある剥片			4.85×3.56×1.60	板状の角礫を素材にしている	安山岩		33.9	第23図
No.39	W19	31層中	274	53.67	石核			9.00×6.70×4.10		安山岩	風化している	158.0	第23図

註) No25、26、29はその出土層準から第21～27層上面に属するものと考えられる。

第2表 U18区・W19区の第6～9文化層出土礫石質鑑定表

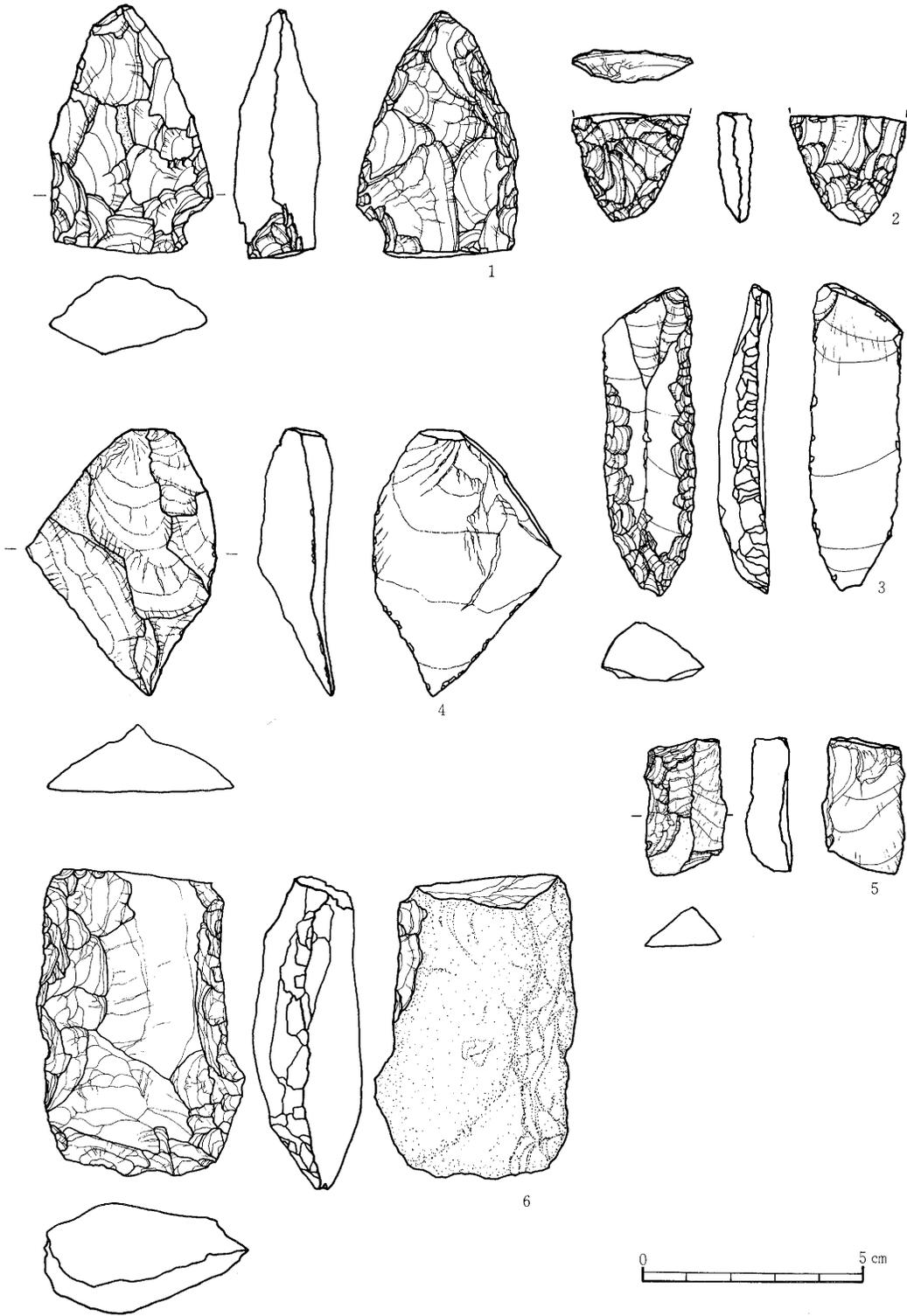
U18区

番号	標高(m)	層位	石質	水の作用の程度	番号	標高(m)	層位	石質	水の作用の程度	番号	標高(m)	層位	石質	水の作用の程度
1	55.300	21-27 間層上面	完全に風化した安山岩	○	18	53.500	21-27 間層上面	凝灰岩	△	35	53.530	21-27 間層上面	玉髓	×
2	55.390	21-27 間層上面	完全に風化した安山岩	○	19	53.500	21-27 間層上面	風化した安山岩	△	36	53.485	21-27 間層上面	珪質砂岩	○
3	55.550	21-27 間層上面	細粒砂岩	○	20	53.500	21-27 間層上面	(未鑑定)	○	37	53.490	21-27 間層上面	玄武岩 or 安山岩	○
4	53.550	21-27 間層上面	細粒凝灰岩	○	21	53.495	21-27 間層上面	風化した安山岩	△	38	53.515	21-27 間層上面	風化した安山岩	○
5	53.540	21-27 間層上面	珪化した安山岩	○	22	53.460	21-27 間層上面	?	○	39	53.535	21-27 間層上面	凝灰質細粒砂岩	○
6	53.520	21-27 間層上面	珪質砂岩?	○	23	53.495	21-27 間層上面	風化をうけた安山岩	△	40	53.530	21-27 間層上面	珪化をうけた凝灰岩	×
7	53.500	21-27 間層上面	風化した安山岩	△	24	53.495	21-27 間層上面	風化した安山岩	○	41	53.460	21-27 間層上面	流紋岩 or 酸性凝灰岩が 風化したもの	△
8	53.500	21-27 間層上面	凝灰角礫岩	○	25	53.510	21-27 間層上面	安山岩	○	42	53.530	21-27 間層上面	流紋岩	○
9	53.490	21-27 間層上面	凝灰岩(細粒)	○	26	53.500	21-27 間層上面	風化した安山岩	×	43	53.540	21-27 間層上面	凝灰質砂岩?	○
10	53.540	21-27 間層上面	完全に風化した安山岩	○	27	53.510	21-27 間層上面	安山岩	○	44	53.545	21-27 間層上面	酸性凝灰岩	○
11	53.510	21-27 間層上面	凝灰岩	○	28	53.325	21-27 間層上面	風化した安山岩	△	45	53.510	21-27 間層上面	細粒凝灰岩	○
12	53.530	21-27 間層上面	?	○	29	53.490	21-27 間層上面	安山岩	○	46	53.510	21-27 間層上面	軽石	○
13	53.530	21-27 間層上面	完全に風化した安山岩	○	30	53.500	21-27 間層上面	風化した安山岩	△	47	53.490	21-27 間層上面	珪質岩	○
14	53.490	21-27 間層上面	風化した安山岩	△	31	53.490	21-27 間層上面	?	△	48	53.450	21-27 間層上面	珪化した凝灰岩	○
15	53.500	21-27 間層上面	完全に風化した安山岩	○	32	53.505	21-27 間層上面	?	△	49	53.510	21-27 間層上面	?	○
16	53.465	21-27 間層上面	?	○	33	53.505	21-27 間層上面	?	○	50	53.530	21-27 間層上面	石英	×
17	53.495	21-27 間層上面	?	○	34	53.510	21-27 間層上面	珪岩	○	51	53.510	21-27 間層上面	完全に風化した安山岩	△

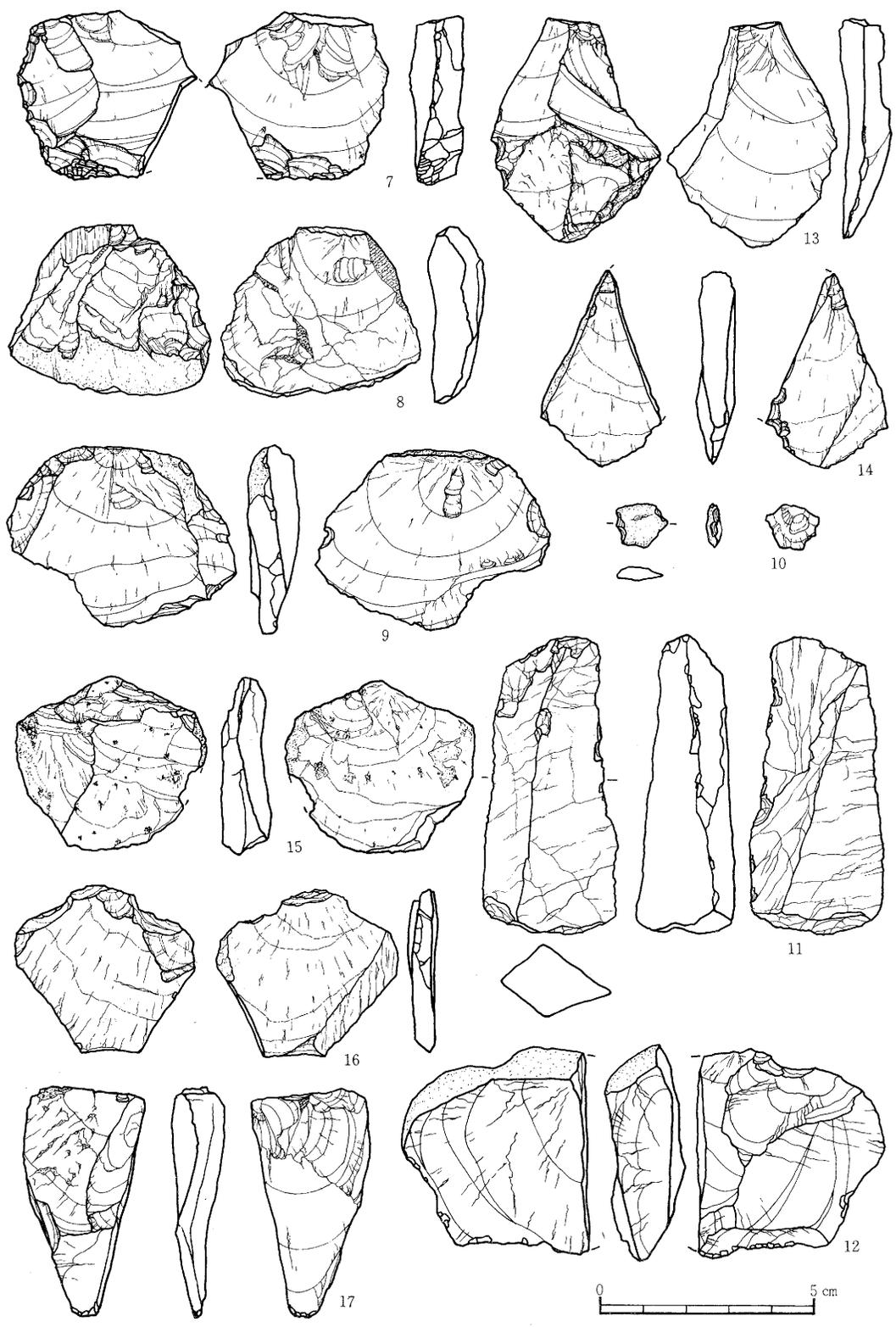
W19区

番号	標高(m)	層位	石質	水の作用の程度	番号	標高(m)	層位	石質	水の作用の程度	番号	標高(m)	層位	石質	水の作用の程度
1	53.860	22層上面	珪岩	○	12	53.900	24層上面	細粒凝灰岩	○	23	53.820	29層上面	石英安山岩	○
2	53.890	22層上面	珪質凝灰岩	○	13	54.010	24層上面	細粒砂岩	○	24	55.429	29層上面	珪化した流紋岩	○
3	53.890	22層上面	?	○	14	54.020	24層上面	珪質頁岩	○	25	53.850	29層上面	火山岩	○
4	53.880	22層上面	珪質砂岩	○	15	54.000	24層上面	細粒砂岩	○	26	53.890	29層上面	珪質岩	○
5	53.740	23層上面	流紋岩	○	16	53.960	24層上面	珪質岩	○	27	53.900	29層上面	?	○
6	55.420	23層上面	未鑑定	○	17	54.060	24層上面	細粒凝灰岩	○	28	53.890	29層上面	珪質岩	○
7	55.419	23層上面	未鑑定	○	18	53.950	24層上面	珪質砂岩	○	29	53.780	29層上面	珪岩	○
8	53.870	23層上面	安山岩 or 玄武岩	○	19	53.830	24層上面	珪質頁岩	○	30	55.414	29層上面	珪化した流紋岩	○
9	53.740	24層上面	風化した安山岩	△	20	53.970	27層上面	珪化した凝灰岩	○	31	53.690	29層上面	安山岩	○
10	53.895	24層上面	褐鉄岩	○	21	55.414	27層上面	?	○	32	53.850	29層上面	珪質岩	○
11	53.890	24層上面	珪岩	○	22	53.840	29層上面	火山岩	○					

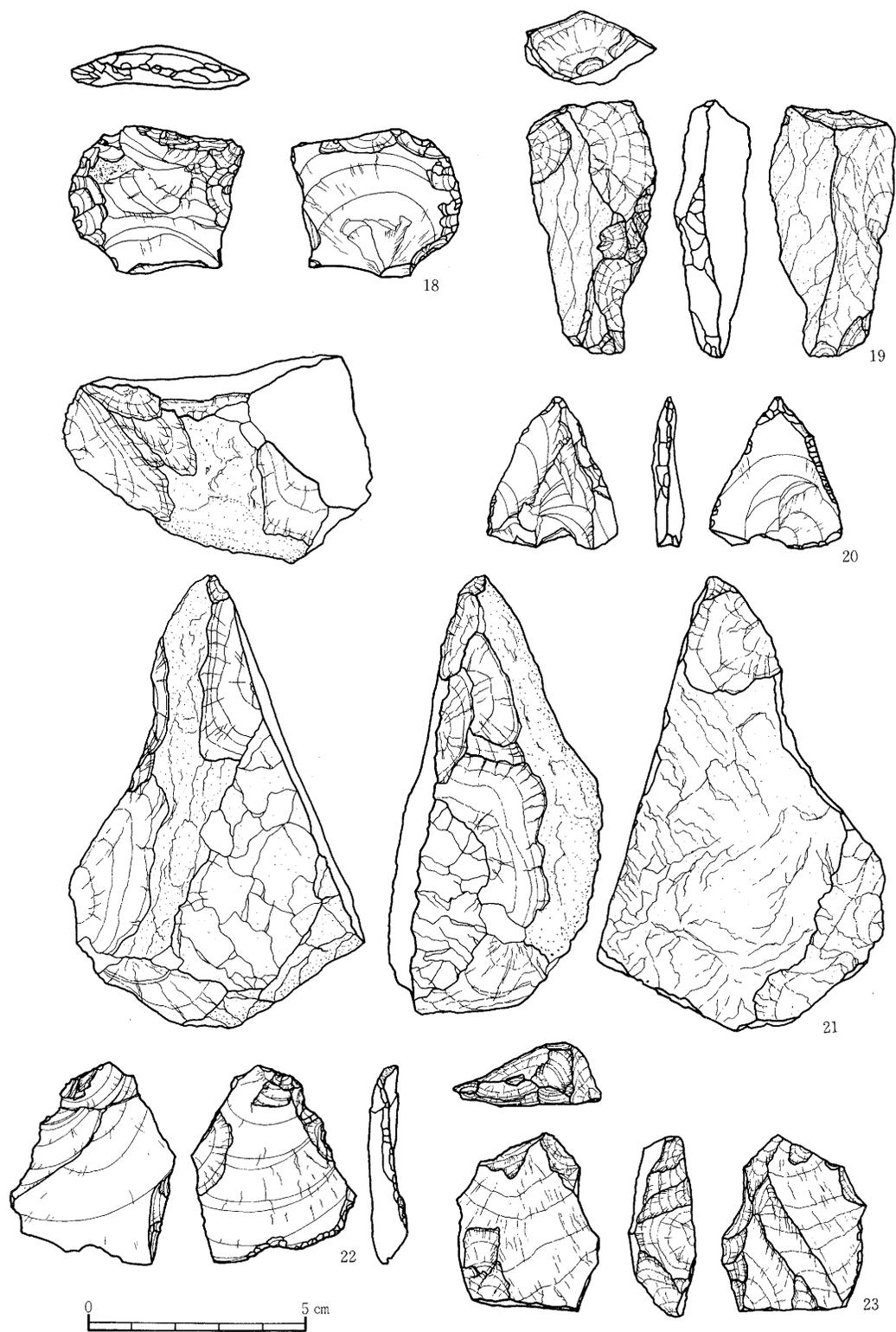
(註) 水の作用による礫表面の変化の程度の強弱を○、△、×印で示した。○印は最も強い作用、△印は中程度の作用、×印は最も弱い作用を示している。



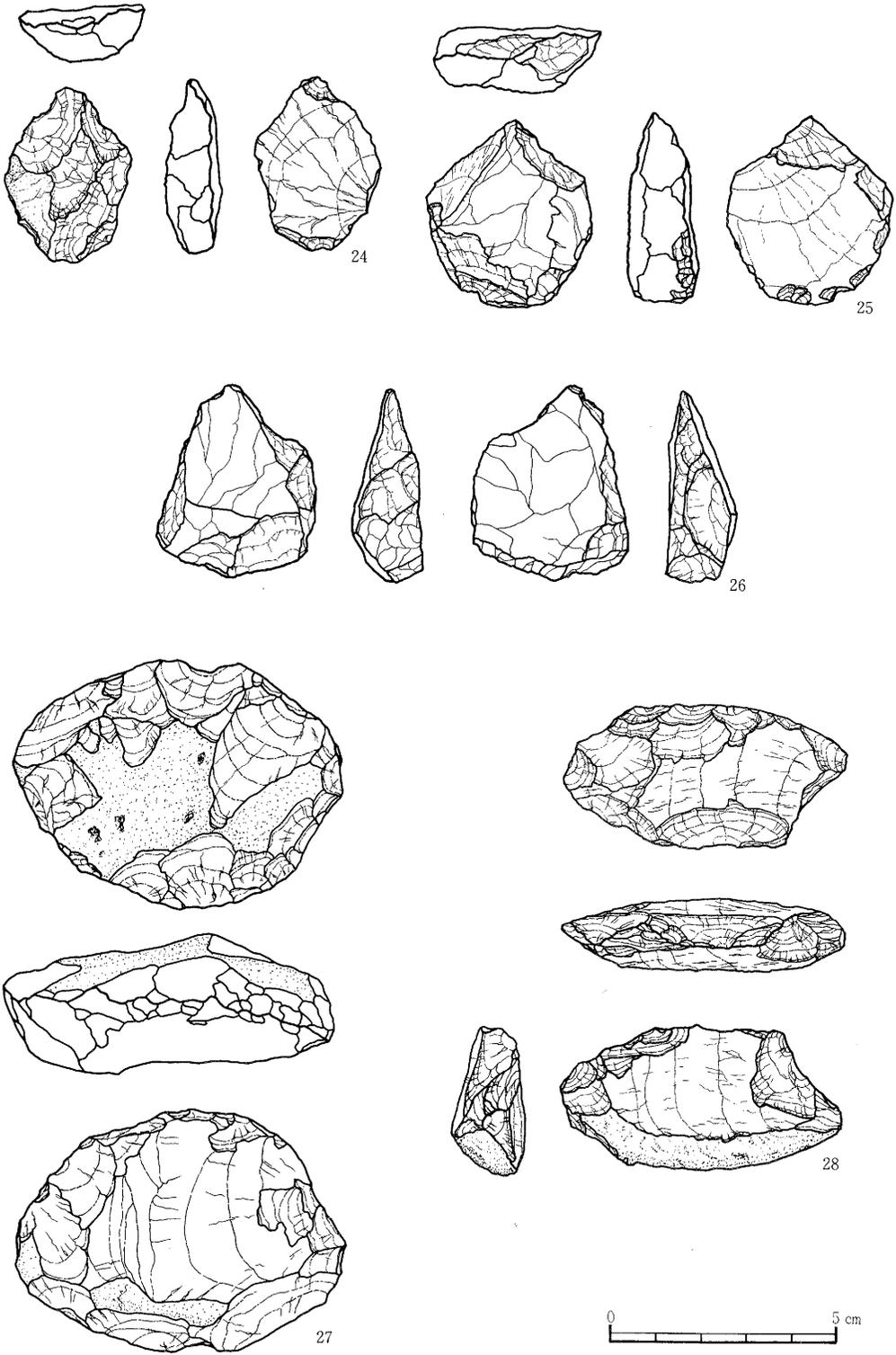
第17図 第5・6・7・8層上面出土石器



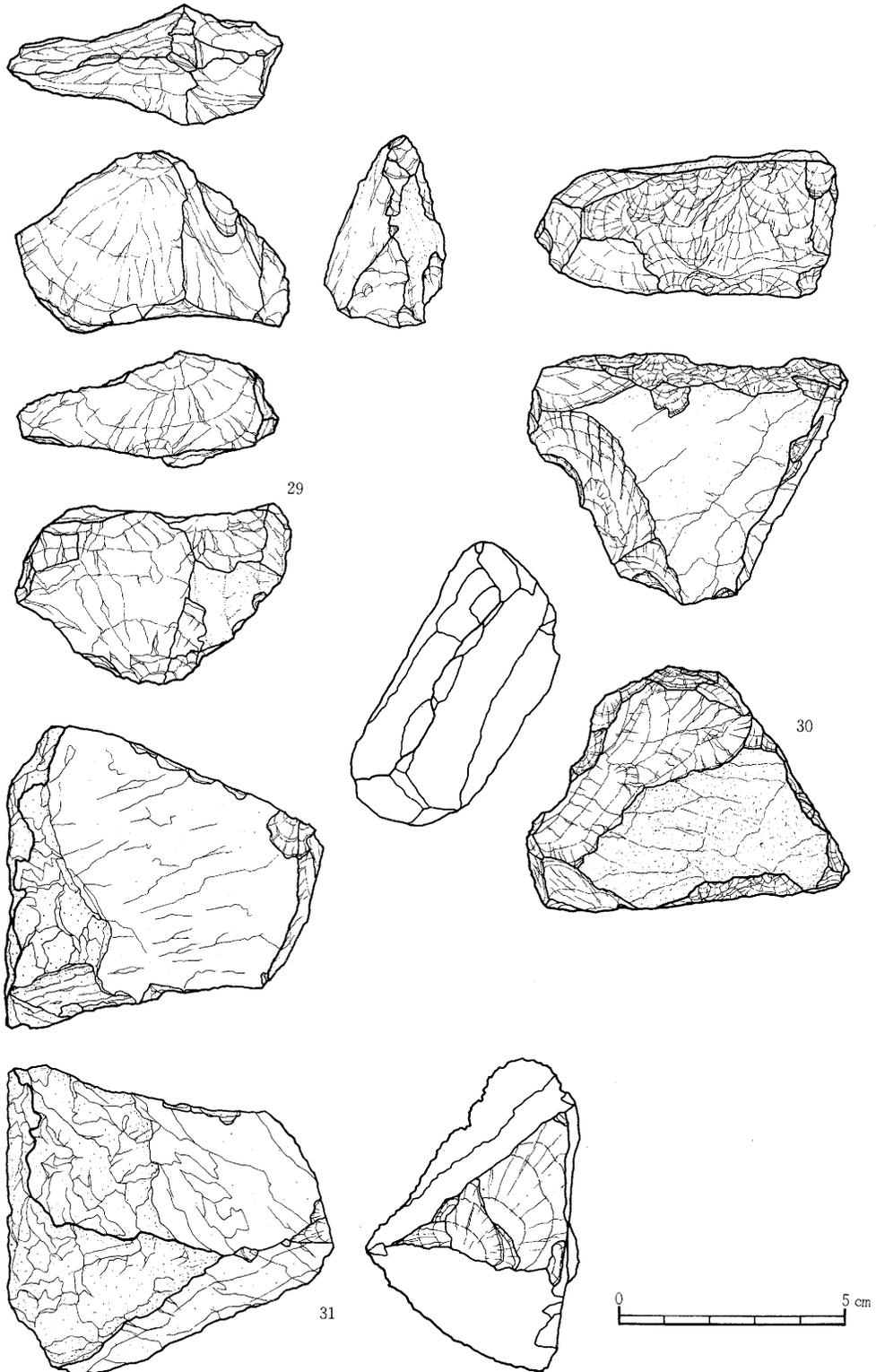
第18図 第9・21・22・23層上面出土石器



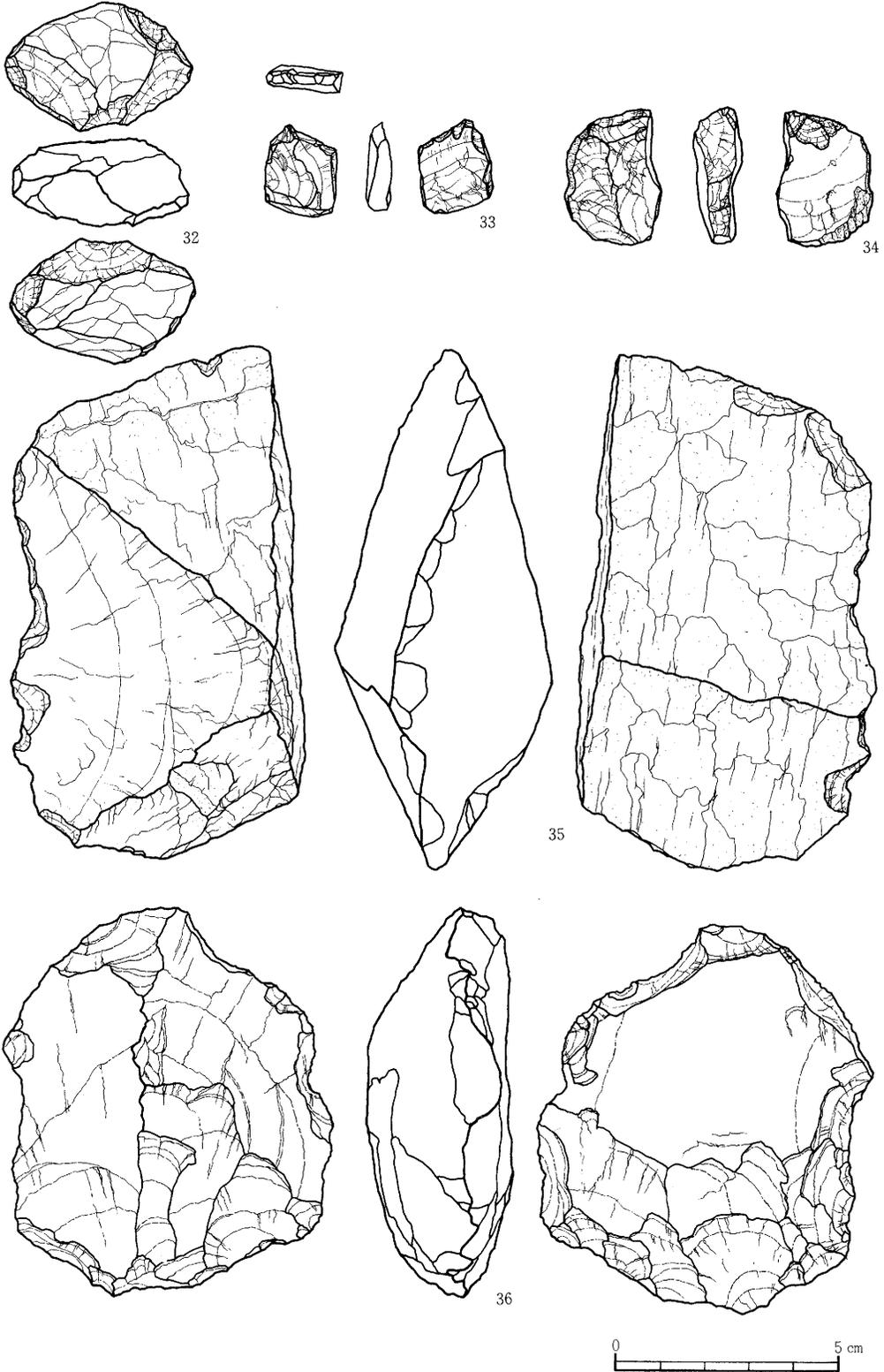
第19図 第24層上面・第21層中出土石器



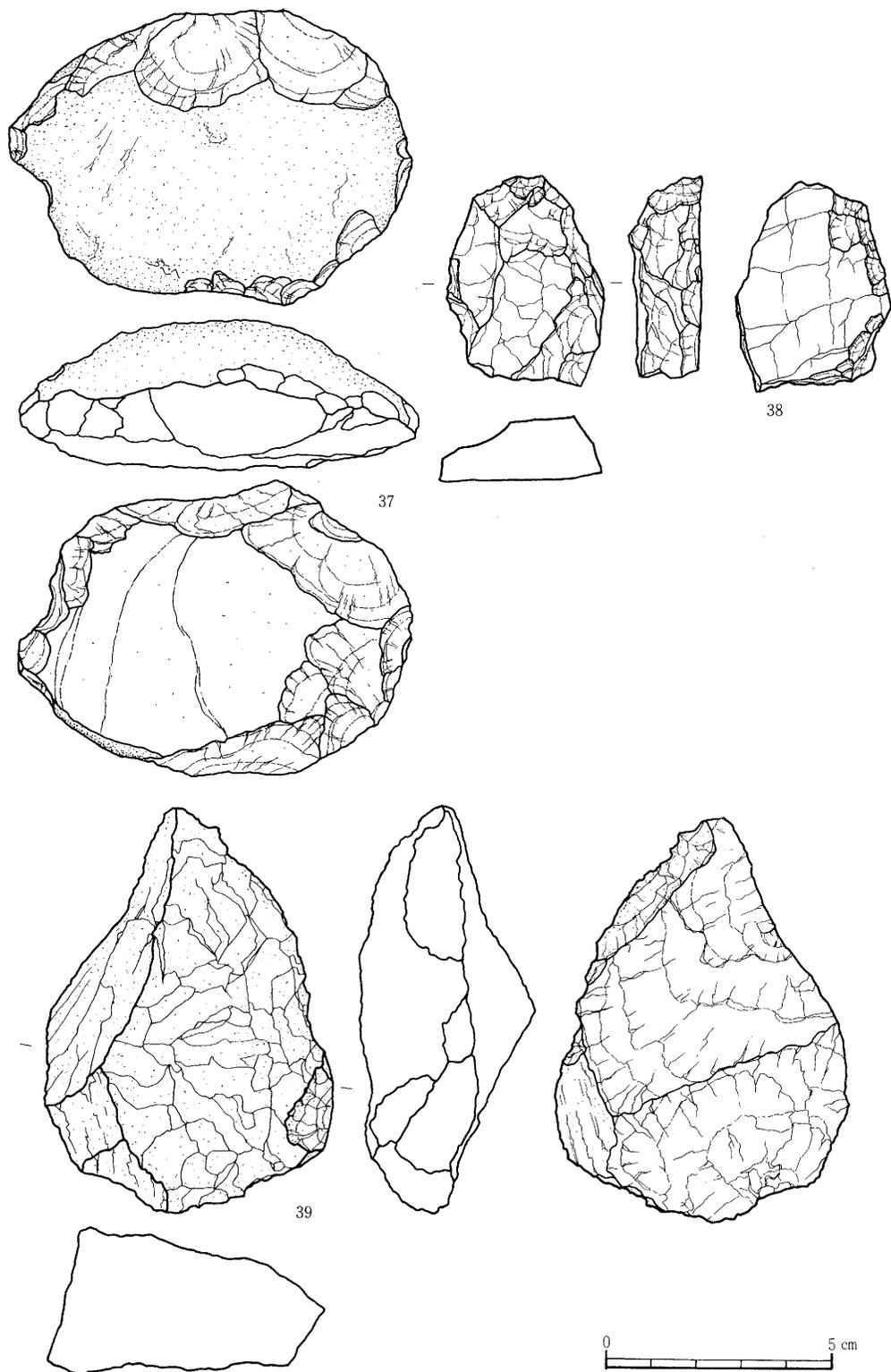
第20图 第21—27间層上面出土石器



第21図 第21—27間層上面出土石器



第22図 第27層上面・第29層上面出土石器



第23圖 第29層上面・第31層中出土石器

3. 縄文時代

(1) 縄文時代の住居跡

N-21住居跡

遺構の確認： 東区中央部やや西寄りに位置し、N-20・21、O-20・21区の第2層上面で確認された。

重複・増改築： 確認されなかった。

平面形・規模： 平面形は、長軸約4.4m、短軸約4mのやや楕円形である。長軸方向は、ほぼ南東-北西である。

堆積土： 住居跡内の堆積土は次の5層に大別される。

1層（褐色シルト層） 最上層である。住居跡の北東部分にのみ確認された。

2層（暗褐色シルト層） 住居跡の中央部に堆積しており、ローム粒や炭化物を多量に含んでいる。多量の一括土器が出土しており、住居跡内の他の堆積土中の遺物量よりかなり多い。

3層（炭化物層） 住居跡の西側に厚く堆積しており、極めて多量の炭化物粒、炭化物片を含んでいる。

4層（褐色シルト層） 住居跡全体に堆積しており、壁際に近づくにつれて厚く堆積している。ローム粒を多く含んでいる。

5層（暗褐色粘土質シルト層） 住居跡壁際の床面に堆積している。

壁： 第2層、第3層、ローム層を壁としている。立ち上がりは全体的に急角度であり、現存の壁高は30～60cmである。

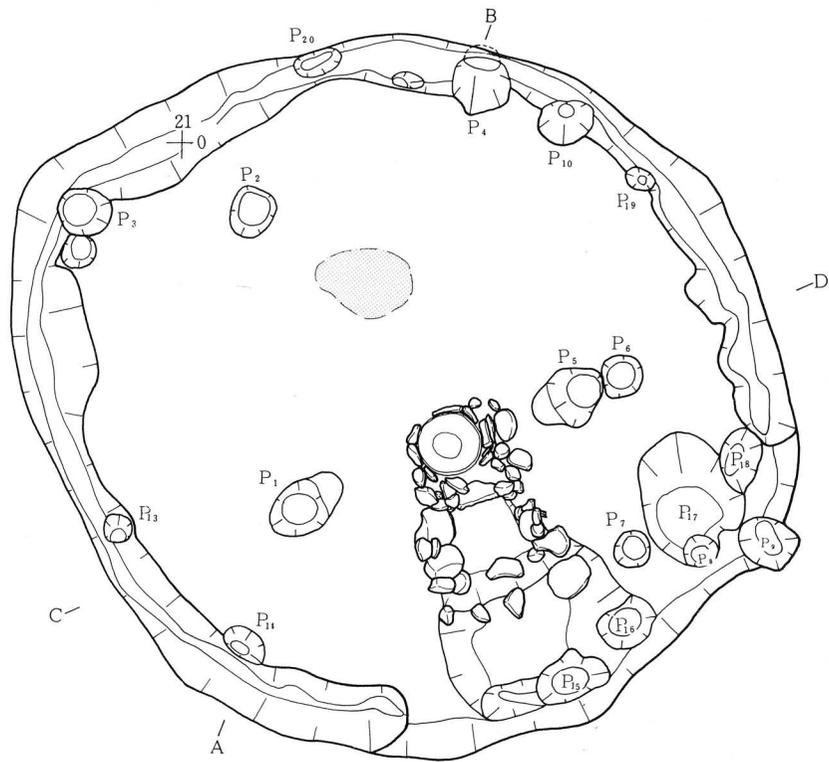
床面： ローム層を床としている。平坦で堅い。

周溝： 炉の部分を除いてはほぼ全周している。幅約15～30cm、深さ約10～15cmで断面形はU字形である。周溝の底面は平坦でなく凸凹している。

柱穴： 床面および周溝から18個のピットが検出されているが、いずれも柱痕跡は確認されなかった。ピットの大きさ、深さ、堆積土などをもとに検討した結果、P₁・P₂・P₃・P₄・P₅が、ピットの径が30cm前後、深さが50cm以上で、堆積土が暗褐色土と共通しており、炉を中心とした配置が考えられ、これらは、本住居跡に伴う柱穴と考えられる。

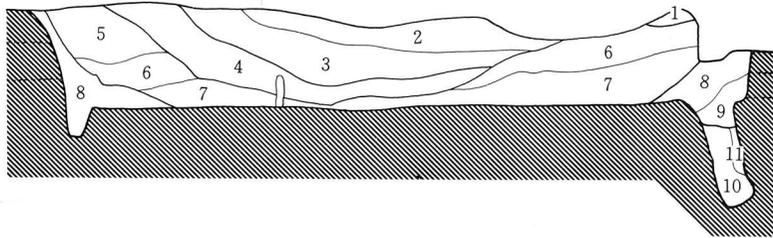
炉： 住居跡内南東側に、土器埋設石組部と石組部および掘り込み部からなる炉が検出された。長さ約170cm、最大幅約100cmである。土器埋設石組部および石組部に火熱を受けた痕跡が認められた。

その他の施設： 住居跡中央部やや北寄りに、焼土のつまった浅い落ち込みが検出された。規



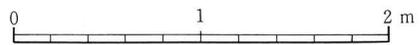
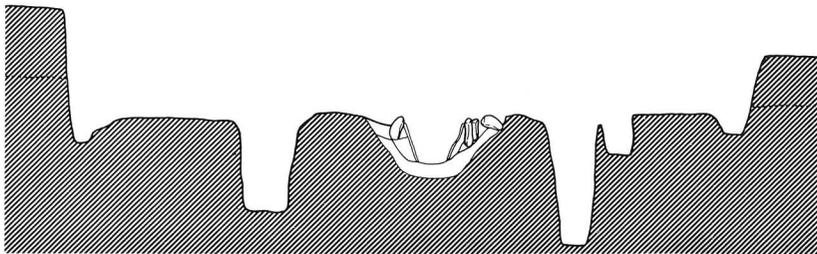
55,300 m
A

—B



55,300 m
C

—D



第24图 N-21住居跡実測図

第3表 N-21住居跡土層観察表

層位	層No.	土色	土性	備考
第1層	1	10YR $\frac{3}{4}$ (褐色)	シルト	
第2層	2	7.5YR $\frac{3}{4}$ (暗褐色)	シルト	ローム粒、焼土粒、炭化物を多量に含む。多量の一括土器出土
	3	7.5YR $\frac{3}{4}$ (暗褐色)	シルト	ローム粒、炭化物を含む。一括土器出土
第3層	4	10YR $\frac{3}{4}$ (黒褐色)	シルト	極めて多量の炭化物を含む。
第4層	5	10YR $\frac{3}{4}$ (褐色)	シルト	ローム粒を多量に含む。
	6	10YR $\frac{3}{4}$ (明褐色)	シルト	ローム粒を含む。
	7	10YR $\frac{3}{4}$ (褐色)	シルト	
第5層	8	7.5YR $\frac{3}{4}$ (暗褐色)	粘土質シルト	ローム粒、炭化物を少量含む。
	9	7.5YR $\frac{3}{4}$ (暗褐色)	粘土質シルト	ローム粒を少量含む。
ピット第1層	10	7.5YR $\frac{3}{4}$ (暗褐色)	シルト	ローム粒を多量に含む。
第2層	11	7.5YR $\frac{3}{4}$ (明赤褐色)	シルト	

第4表 N-21住ピット観察表

ピット番号		1		2		3		4		5		6	
形状		楕円		楕円		円		円		楕円		円	
大きさ	掘方	45 × 33		29 × 25		28 × 28		32 × 32		33 × 29		25 × 25	
深さ		51		64		35		64		64		20	
堆積土	番号	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	1
	土色	7.5YR $\frac{3}{4}$ 暗褐	5YR $\frac{3}{4}$ 明赤褐	7.5YR $\frac{3}{4}$ 暗褐	5YR $\frac{3}{4}$ 明赤褐	7.5YR $\frac{3}{4}$ 暗褐							
	土性	シルト	シルト	シルト	粘土質シルト	シルト							
混入物		炭化物少量		ローム粒		炭化物少量		ローム粒		ローム粒		ローム粒	

ピット番号		7		8		9		10		11		12		13		14		15		16		17		18		19		20	
形状		円		円		楕円		楕円		楕円		円		円		楕円													
大きさ	掘方	23 × 22		20×18		30 × 25		31×27		18×10		20×18		15×15		25×18		40×25		30×25		60×55		33×21		17×12		22×12	
深さ		29		21		37		32		16		5		16		19		26		15		13		13		12		7	
堆積土	番号	1				1																							
	土色	7.5YR $\frac{3}{4}$ 暗褐				10YR $\frac{3}{4}$ 暗褐																							
	土性	シルト		シルト		シルト		シルト		シルト		シルト		シルト		シルト		シルト		シルト		シルト		シルト		シルト		シルト	

模は53cm×37cmの楕円形をしており、かなりの火熱を受けている。これは地焼炉の可能性が考えられる。

○-24住居跡

遺構の確認： 東区中央に位置し、○-24・25、P-24・25区の第4層上面で確認された。

重複・増改築： ○-24 a・b土壌、○-25土壌と重複する。本住居跡は、○-24 a土壌に切られ、○-24 b土壌、○-25土壌を切っている。

平面形・規模： 平面形は、径約3.5m のほぼ円形である。

堆積土： 住居跡内の堆積土は次の4層に大別される。

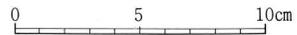
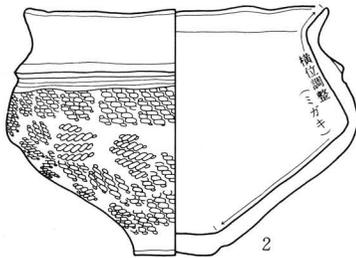
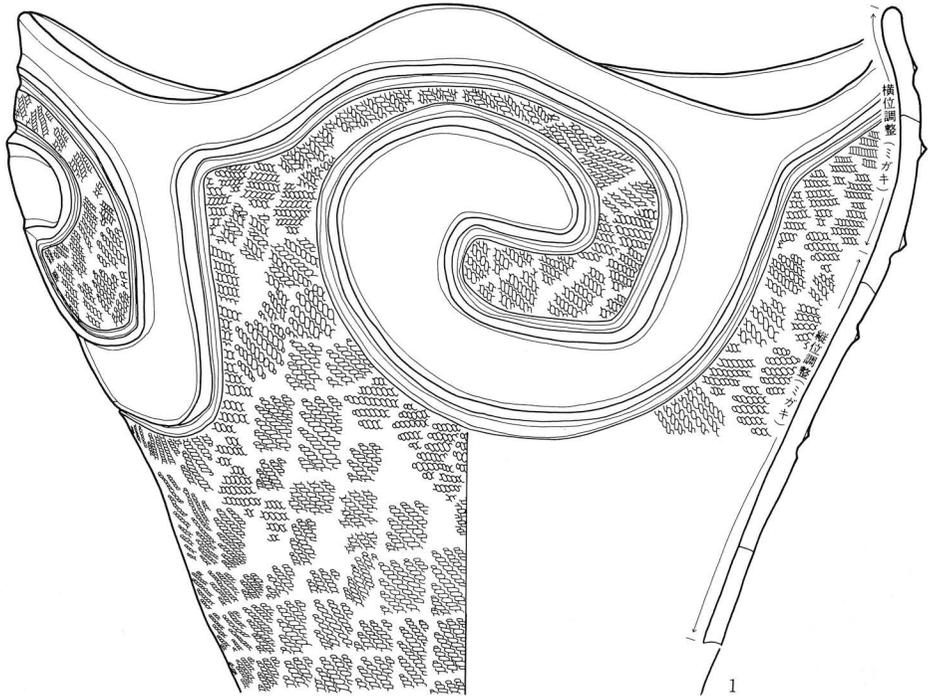
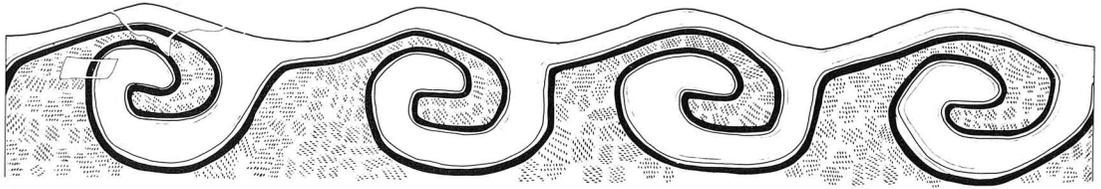
1層（暗褐色シルト層） 最上層である。住居跡中央部および2層の凹んでいる部分で確認された。

2層（炭化物・焼土層） ほぼ床面全域を覆うように堆積しており、極めて多量の炭化物・焼土を含んでいる。

3層（褐色粘土質シルト層） 周溝内にのみ確認された。

4層（黄褐色粘土質シルト層） 細砂粒を含む層で、周溝底面に薄く堆積している。

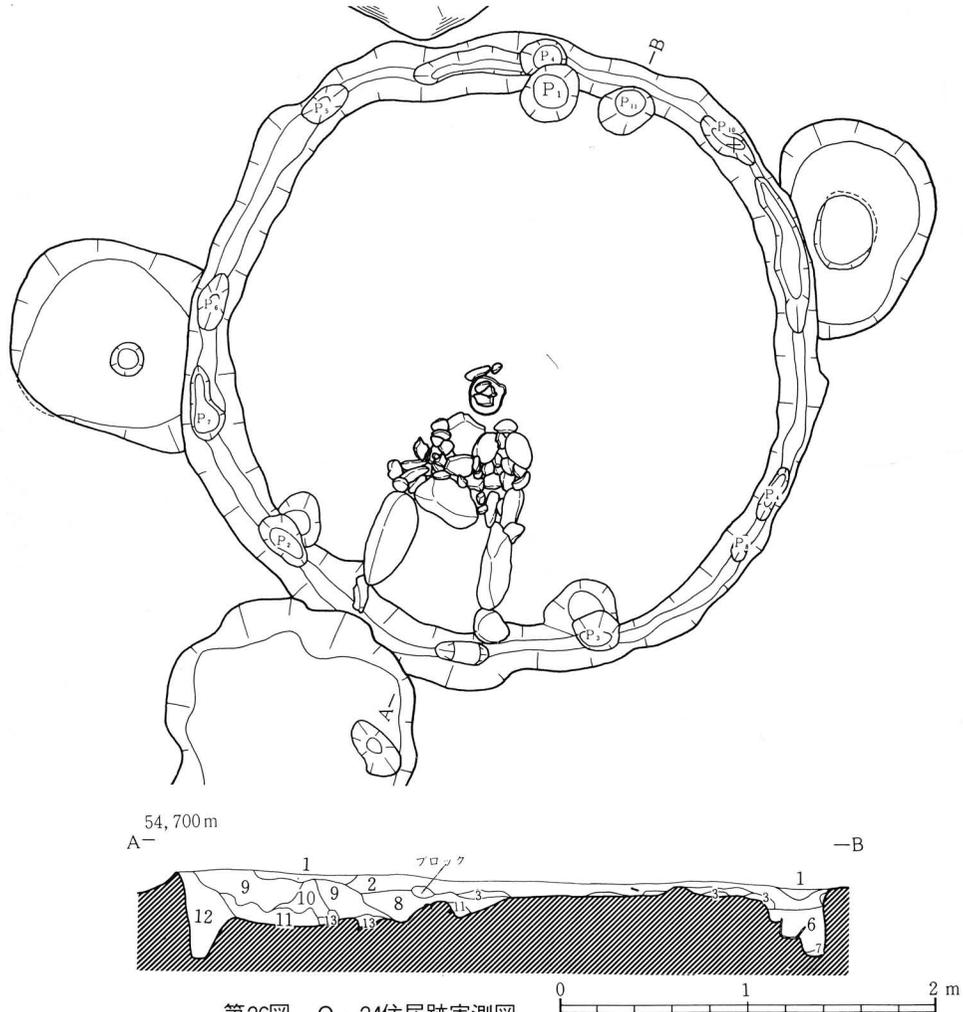
壁： 第3層、ローム層を壁としている。立ち上がりは急角度であり、現存の壁高は5～15cmである。



第25図 N-21住居跡出土土器実測図

第5表 N-21住居跡出土土器註記表

図版	実測図No.	出土状況	外面施文・調整	内面調整
図版7-3	25図1	第1層	縄文(L R)縦位斜位回転・隆線文→沈線文→調整	横位調整(ミガキ)
◇-6	25図2	炉埋設土器	縄文(L R、R L)横位・縦位・斜位回転・付加縄文 (R L + L)横位・斜位回転・隆線文→沈線文→調整	縦位調整(ミガキ)→横位調整(ミガキ)



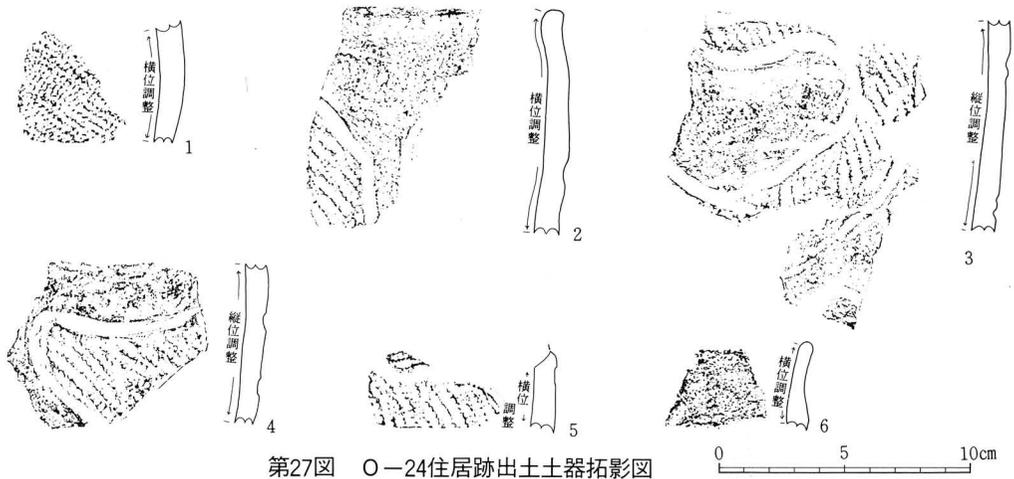
第26図 O-24住居跡実測図

第6表 O-24住居跡土層観察表

層位	層 No.	土色	土性	備考
第1層	1	10 Y R 3/4 (暗褐色)	シルト	炭化物、ローム粒を少量含む。
	2	10 Y R 3/4 (暗褐色)	シルト	炭化物、ローム粒、焼土粒を多量に含む。
2	3	10 Y R 3/4 (黒褐色)	シルト	炭化物、焼土粒を多量に含む。
	4	10 Y R 3/4 (褐色)	粘土質シルト	
	5	10 Y R 3/4 (褐色)	粘土質シルト	ローム粒を含む。
3	6	7.5 Y R 3/4 (褐色)	粘土質シルト	
	7	10 Y R 3/4 (黄褐色)	粘土質シルト	細粒砂を含む。
第4層	8	10 Y R 3/4 (暗褐色)	シルト	炭化物、焼土含む。
	9	7.5 Y R 3/4 (暗褐色)	シルト	炭化物、ローム粒を含む。
イ第1層	10	7.5 Y R 3/4 (暗褐色)	シルト	炭化物を含む。
	11	7.5 Y R 3/4 (黒褐色)	シルト	炭化物を多量に含む。
3	12	7.5 Y R 3/4 (暗褐色)	シルト	
	13	7.5 Y R 3/4 (褐色)	シルト	

第7表 O-24住居跡ピット観察表

ピット番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
形状	円	楕	円楕	円楕	円楕	円楕	円楕	円楕	円楕	円楕	円
大きさ	28×35	20×33	25×30	20×25	15×28	15×32	18×40	10×15	8×31	13×35	30×30
深さ	15	46	55	70	24	25	25	28	14	33	32
番号	1	1	1								
堆積土色	7.5 Y R 3/4 暗褐	7.5 Y R 3/4 暗褐	7.5 Y R 3/4 暗褐								
土性	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト



第27図 O-24住居跡出土土器拓影図

第8表 O-24住居跡出土土器註記表

実測図No.	出土状況	外面施文・調整	内面調整	備考
1	第1層	縄文(LR)横位回転	横位調整(ナデ)	胎土中に繊維混入
2~5	第2層	縄文(RL)横位回転→沈線文→調整	縦位調整(ナデ)→横位調整(ナデ)	同一個体
6	第2層	沈線文→調整	横位調整(ミガキ)	

床面: ローム層を床としている。平坦で堅い。

周溝: 住居跡を全周している。幅約15~30cm、深さ約10~45cmである。断面形はU字形である。また、北側では底部が段を形成し、底面が10cm以上のレベル差を示している。

柱穴: 住居跡内より11個のピットが検出されているが、いずれも周溝内である。柱痕は確認されなかった。ピットの規模、堆積土などをもとに検討した結果、 $P_2 \cdot P_3 \cdot P_4$ が、ピットの掘り方の径が20~30cm、深さ46cm以上であり、炉を中心とした配置が考えられ、それらは、本住居跡に伴う柱穴と考えられる。

炉: 住居跡内南側やや西寄りに、土器埋設石組部と石組部からなる炉が検出された。長さ約150cm、最大幅約80cmである。土器埋設石組部は、石組部が破壊されており、2個の石しか残存しなかった。

(2) 縄文時代の土壌

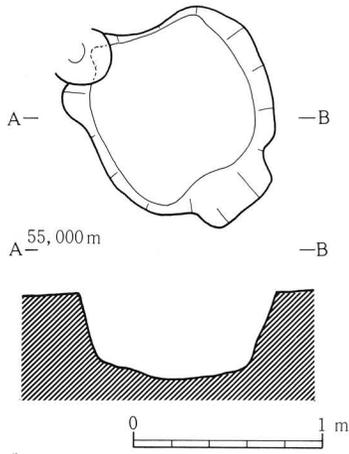
縄文時代に属すると考えられる土壌は、形態的に次の表のように大別される。

本文では、1類から4類までの代表的なものを取り上げておきたい。

1類: P-21d土壌

遺構の確認: 東区中央やや西側に位置し、P-21区の3層上面で確認された。

遺構の重複: 南東部をピットによって切られている。



第28図 P-21d 土壤実測図

形態・規模： 平面形は、径約1.00mのゆがんだ円形である。深さは51cmに達する。

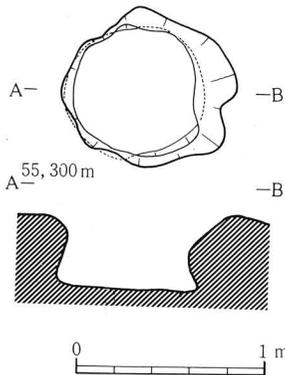
2 a 類： Z-17a 土壤

遺構の確認： 東北北西隅に位置しており、Z-17区の3層中で確認された。

遺構の重複： 他の遺構との重複は認められなかった。

形態・規模： 平面形は、径約45cmの円形である。深さは40cmに達する。壁は底面からオーバーハングしながら立ち上がるが、上半部は崩落している。

2 b 類： K-28 土壤



第29図 Z-17a 土壤実測図

遺構の確認： 東区東南隅の南東斜面に位置し、J-27・28、K-27・28区のローム層上面で確認された。

遺構の重複： 北東側でK-28住居跡と重複している。本土壙がK-28住居跡の周溝を切っている。

形態・規模： 平面形は径約2.05mの円形である。深さは北西側で80cmに達する。壁は底面からややオーバーハング気味に立ち上がる。また、底面中央部に、39cm×35cmのほぼ円形で、深さ11cmのピットを有している。

2 類は、いわゆるフラスコ状土壙と呼称されるものである。

3 類： S-18a 土壤

第9表 土壤分類表

	平面形	断面形	平面形	断面形
1 類				
2 a 類			2 b 類	
3 類				
4 a 類			4 b 類	
5 類	上記の分類以外のもの			

遺構の確認： 東区西端部に位置し、S-18区の第2層上面で確認された。

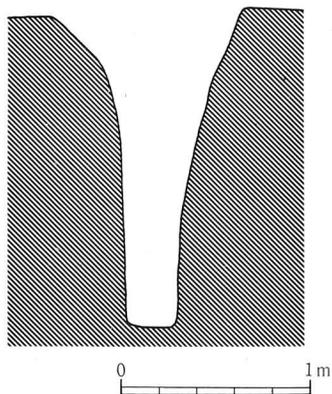
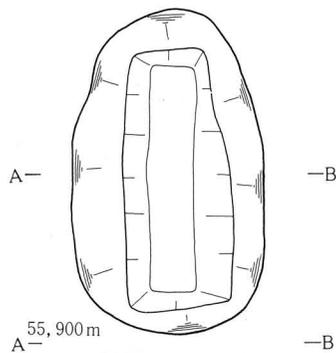
遺構の重複： 他の遺構との重複は確認されなかった。

形態・規模： 平面形は、確認面では172cm×100cmの楕円形であるが、底面では、110cm×28cmの長方形である。深さは165cmに達する。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がっている。上部は、崩落のためか、角度がゆるやかになっている。

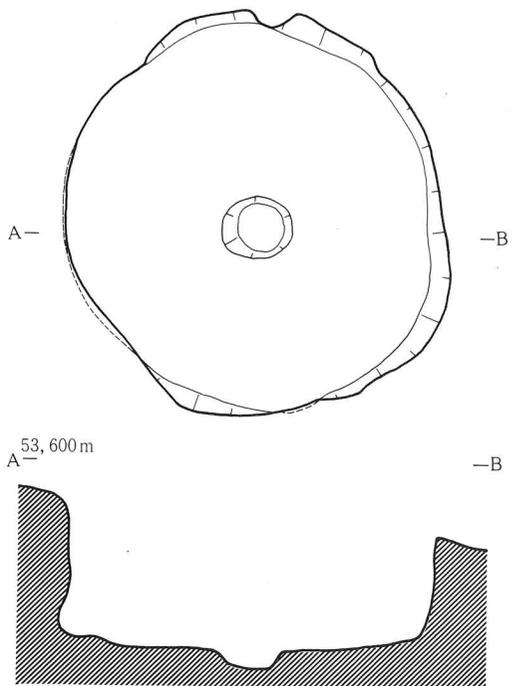
3類は、いわゆる落とし穴（Tピット）と呼称されるものである。

4 a類： L-22 e 土壇

遺構の確認： 東区中央やや南寄りに位置し、L-21・22区の第3層中で確認された。



第31図 S-18 a 土壇実測図



第30図 K-28土壇実測図

遺構の重複： 北側でL-22 d土壇、東側でピットと重複する。いずれも本土壇を切っている。

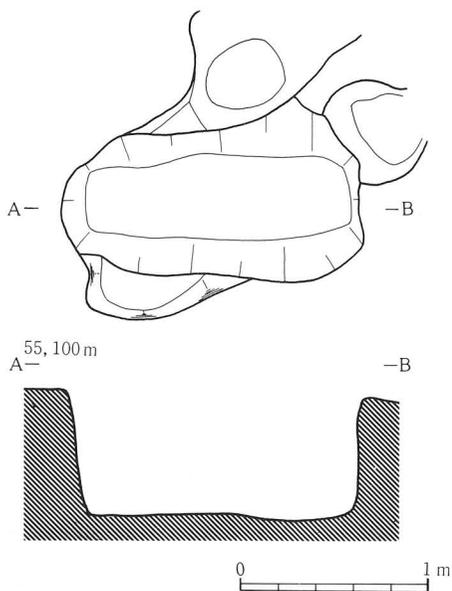
形態・規模： 平面形は156cm×80cmの長方形であるが、南西部が一部崩落している。深さは71cmに達する。壁は底面から急角度で立ち上がっている。

4 b類： N-26 a 土壇

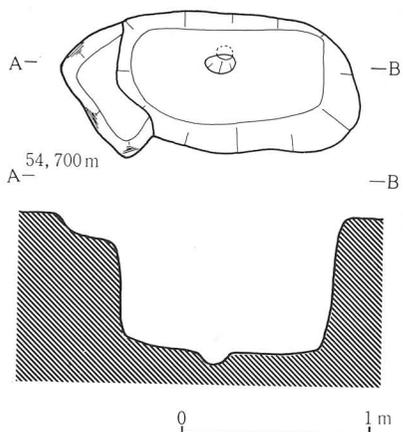
遺構の確認： 東区中央部やや南寄りに位置し、N-25・26区のローム層上面で確認された。

遺構の重複： 他の遺構との重複は確認されなかった。

形態・規模： 平面形は、127cm×75cmの隅丸の長方形であるが、北側が崩落している。深さは77cmに達する。壁は底面から急角度で立ち上がっている。底面中央やや東壁寄りに、17cm×10cmの楕円形で深さ29cmの東側に向かって斜に掘り込まれたピットを有する。



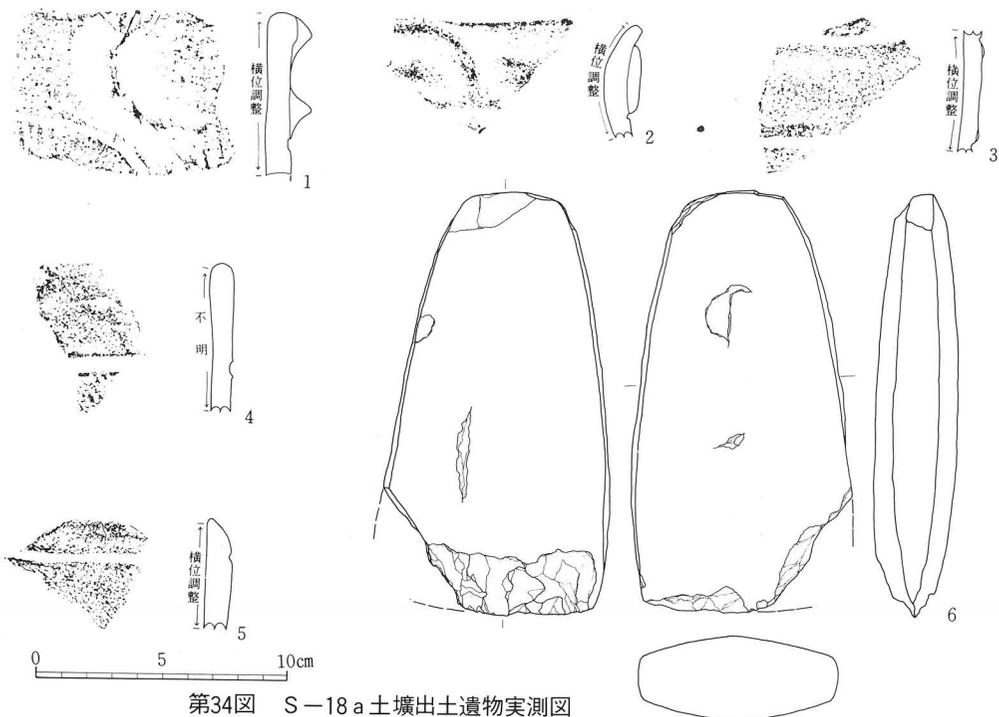
第32図 L-22e 土壌実測図



第33図 N-26a 土壌実測図

第10表 S-18a 土壌出土石器註記表

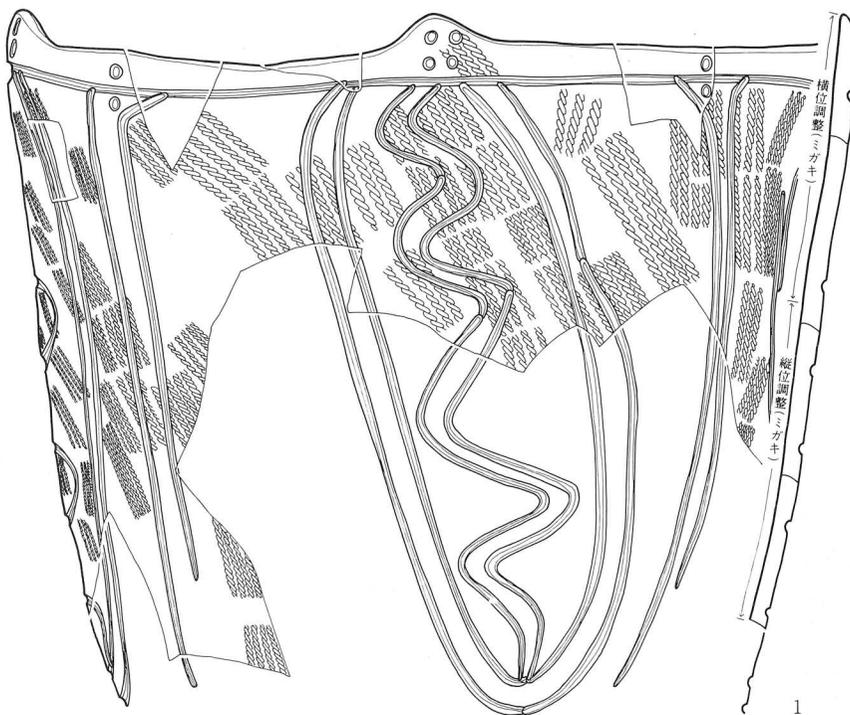
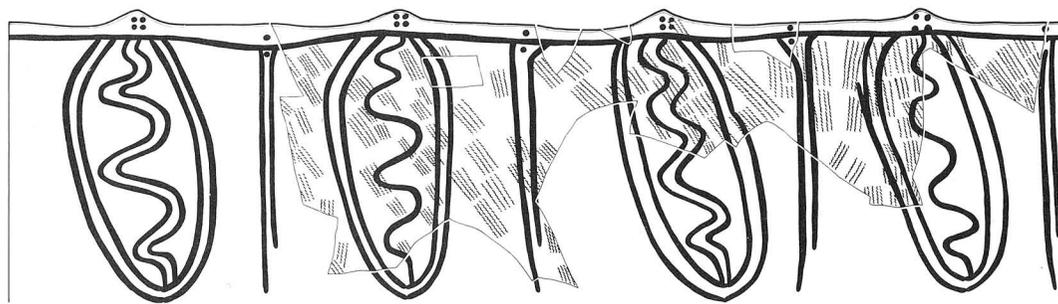
図版	写真No.	出土状況	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	素材
図版9-5	34図6	堆積土中	17	8.7	3.4	蛇紋岩



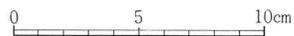
第34図 S-18a 土壌出土遺物実測図

第11表 S-18a 土壌出土石器註記表

図版	実測図No.	出土状況	外面施文・調整	内面調整
	34図 1	堆積土下部	沈線文→隆線文→捺系文(R)→調整	横位調整(ナデ)
	2	堆積土下部	隆線文→沈線文→調整	横位調整(ミガキ)
	3	堆積土下部	縄文(L,R)横位回転・隆線文→沈線文→調整	横位調整(ミガキ)
	4	堆積土下部	縄文(L,R)縦位回転→沈線文→調整	不明
	5	第1層	捺系文(L)→沈線文→調整	横位調整
図版8-1	35図 1	堆積土中	捺系文(R)→沈線文→刺突文→調整	縦位調整(ミガキ)→横位調整(ミガキ)



第35図 S-18a 土壌出土遺物実測図



(3) 遺物包含層

東区内で2箇所の遺物包含層が確認された。東区北側谷部に分布するものと、東区西側のやや北寄りに分布するものである。

谷部包含層は、V～X-23～26区に見られる。調査区の北側へ広がる可能性がある。遺物は縄文時代中期初頭が中心となっており、前期後半および中期後半の遺物が少量混在している。遺物包含層と、谷部の他の遺物を多く含まない地区の堆積土層との区別は困難であった。遺物

の出土状態には方向性、規則性は認められなかった。また層毎の遺物の相違も認められなかった。

東区西側の包含層は、P-U-17~22区の第2層であり、多量の遺物がまとまって出土し、また復元可能なものや、大破片が多いことなど、他地区の第2層には見られない特徴が認められたため、遺物包含層として取扱った。出土遺物は、縄文時代中期末葉が中心であり、中に後期初頭の遺物が少量混在している。他地区の第2層との区別は困難であったが、遺物包含層と認められた地区では、他地区よりも厚く堆積していた。また遺物の出土状態に方向性、規則性は認められなかった。

4. 平安時代

(1) 平安時代の住居跡

T-32住居跡

遺構の確認: 東区北東部の台地東側傾斜上端に位置し、T-32区のローム面で確認された。

重複・増改築: T-32 b 土壌、T-32溝状遺構と重複している。本住居跡が両者を切っている。T-32溝状遺構は、形状より煙道とも考えうるが、焼け面、焼土が認められなく不明である。

平面形・規模: 平面形は、長軸3.5m、短軸3.3mを計る、隅丸方形である。長軸方向は、ほぼ北-南である。

堆積土: 住居跡内の堆積土は、3層確認された。

1層（褐色シルト層） 住居跡全体を覆うように堆積している。火山灰粒を含む。

2層（暗褐色シルト層） 住居跡壁際から床面にわたり広く堆積している。

3層（褐色粘土質シルト層） 住居跡壁際、床面に部分的にみられる。東壁際では多量の焼土炭化物を含む。

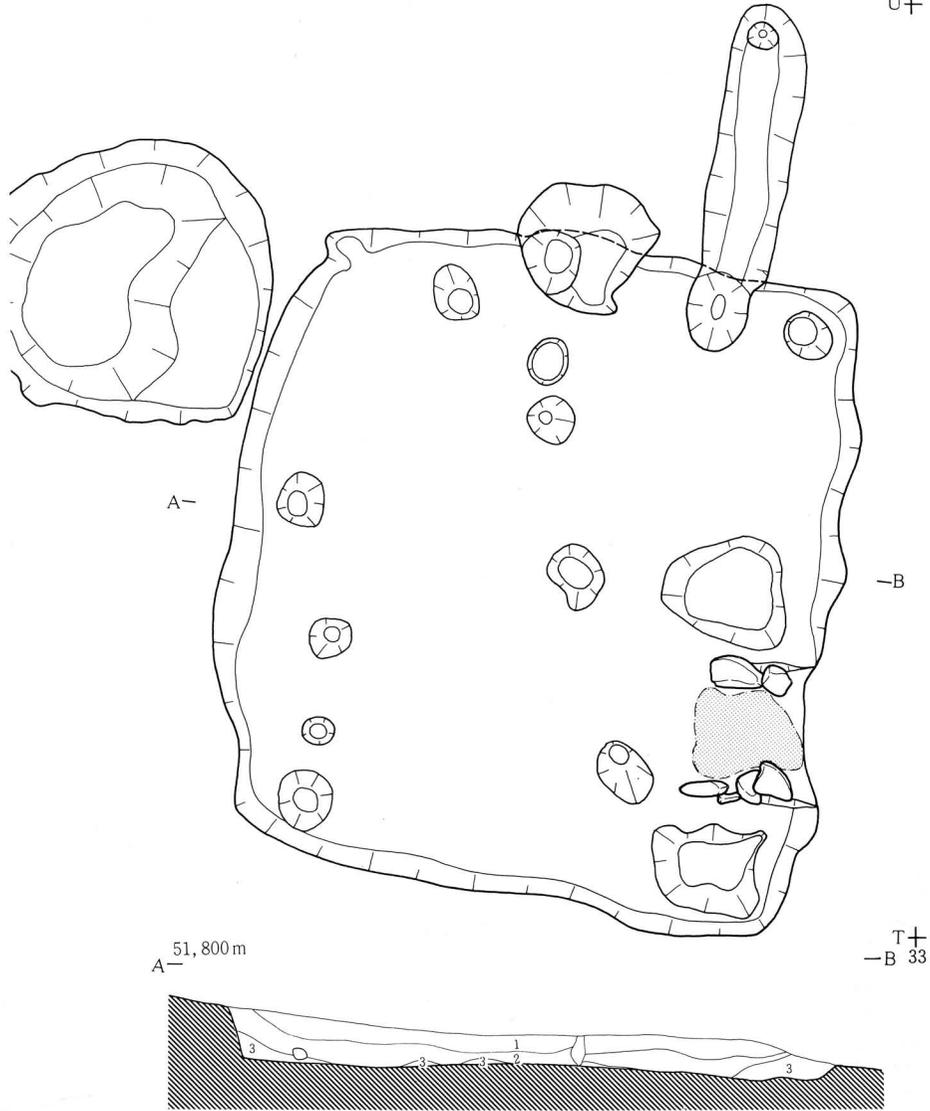
壁: ローム層を壁としている。立ち上がりは全体的にゆるやかである。現存の壁高は、約10~30cmである。

床面: ローム層を床としている。平坦で堅い。

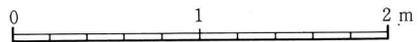
周溝: 確認されなかった。

柱穴: 床面で11個のピットを確認したが、深さ等から柱穴と考えられるものはなかった。

カマド: 住居跡東壁南側に付設されており、燃烧部のみ確認された。規模は、奥行60cm、最大幅80cm、残存高20cmを計る。カマド袖部は、20~30cmの礫を「ハ」の字状に配した石組で構築されている。石組下面には、黒色土が見られ、石組のおさえと考えられる。燃烧部床面は、



第36図 T-32住居跡実測図

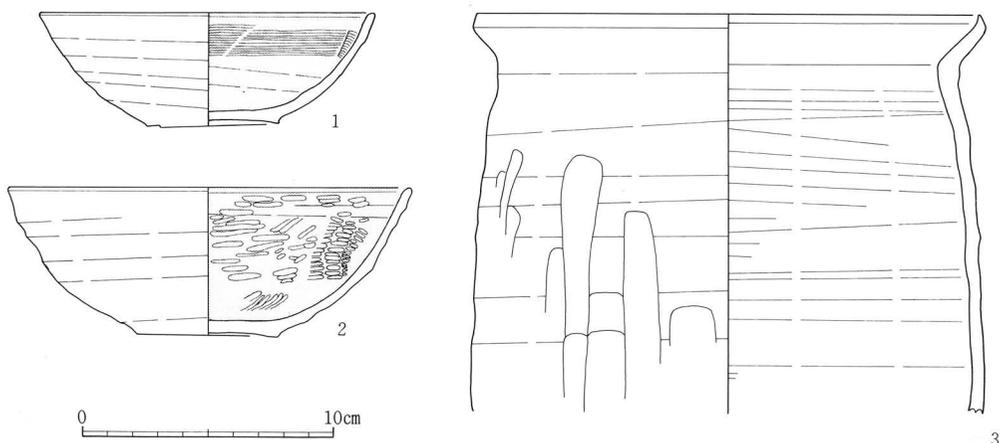


第12表 T-32住居跡土層観察表

層位	層No.	土色	土性	備考
第1層	1	10YR 5/6 (褐色)	シルト	10YR 5/6 (浅黄橙)シルト(火山灰?)を粒状に含む。
	2	10YR 5/6 (暗褐色)	シルト	焼土炭化物を含む。
	3	10YR 5/6 (暗褐色)	粘土質シルト	東壁際で多量の焼土・炭化物を含む。

全体的に赤褐色を呈しており、ゆるやかに壁へ立ち上がる。煙道部、煙出し部は、削平が著しく不明であった。

その他の施設: カマドの南側に50cm×60cm程の不整形のピットが確認された。ピット内よりロクロ土師坏が出土しており、位置、形状より貯蔵穴と考えられる。



第37図 T-32住居跡出土土器実測図

第13表 T-32住居跡出土土器註記表

図版	実測図No.	種別	器種	出土状況	体部外面	底部外面	内面
図版10-23	37図1	土師器	坏	貯蔵穴	ロクロ調整	回転糸切り	ロクロ調整→ヘラナデ→黒色処理
24	2	土師器	坏	貯蔵穴	ロクロ調整	回転糸切り	ロクロ調整→ミガキ→黒色処理
25	3	土師器	甕	カマド	ロクロ調整→ヘラケズリ		ロクロ調整

(2) 平安時代の土壌

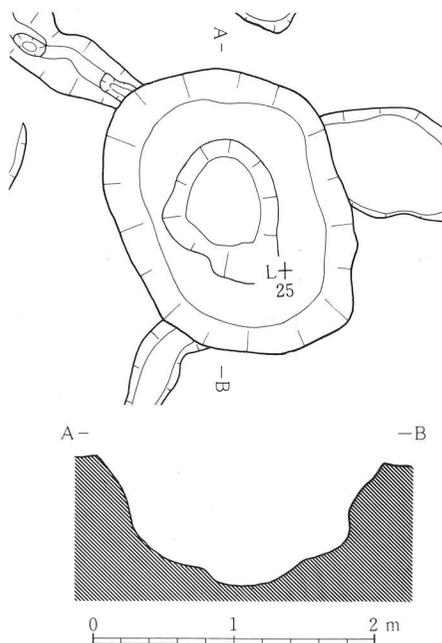
L-25 a 土壌

遺構の確認: 東区中央部やや南寄りに位置し、K-24・25、L-24・25区のローム面で確認された。

遺構の重複: L-25住居・M-25住居・L25 b 土壌と重複している。全ての遺構を切っている。

形態・規模: 平面形は楕円形を呈し、長軸210cm、短軸160cmを計る。底面には更に100×80cm程の楕円形の落ち込みがあり、壁は円形を呈する緩やかなテラスとなり立ち上っている。

出土遺物: 堆積層中より須恵器坏片が出土している。土壌底面に密着して多量の炭化物が検出されている。



第38図 L-25 a 土壌実測図

VI. まとめと今後の課題

山田上ノ台遺跡の今回の発掘調査で得られた成果と今後の課題は、次のようになる。

1. 前期旧石器時代、後期旧石器時代、縄文時代早期、前期、中期、後期、平安時代、近世に亘って各時代の遺物・遺構が検出された。
2. a. 前期旧石器時代の文化層が4枚確認された。
b. 後期旧石器時代の文化層が4枚確認された。また、約3万年前前後に属する文化層が1枚確認された。
c. 旧石器時代各層の石器群は、層理面上にはりついた状態で出土することが多く、原位置を極めて良好に保持している。
3. 旧石器時代の両時代を通して人間の生活の痕跡を残す遺跡は、現在他に例がなく、これらの成果は、これまで明らかにされている中部ローム、下部ロームに属する石器群研究に新しい資料の提供をなし得ると考えられる。
4. 縄文時代以降の検出された遺構は、台地上の平坦面から東～南斜面にかけて濃密に分布している。
5. a. 縄文時代では、住居跡、土壙、遺物包含層が検出されている。
b. 住居跡は21軒検出されているが、全て大木10式期に属するものと考えられる。
c. 土壙は約200基検出されている。
d. 遺物包含層は、2箇所確認されているが、縄文時代中期が中心であり、少量の縄文時代前期、後期の遺物が混在している。
6. a. 平安時代では、住居跡、土壙、遺物包含層などが検出されている。
b. 住居跡は4軒検出されているが、全て表杉ノ入式期に属するものであると考えられる。
c. 土壙は7基検出されている。
7. 近世では、江戸時代の墓壙が3基検出されている。
8. 時期不明のものとして、掘立柱建物跡3軒、溝21条が検出されている。
9. 旧石器時代の各文化層の性格を把握するためには、出土遺物量が不足しているため、今後、より広範囲の発掘調査が必要である。
10. 今後、火山灰の標式火山灰との対比、段丘の形成時期の解明、旧石器時代の自然環境の復原などが必要である。
11. 今後の整理作業の中で、住居跡のあり方、大木10式土器の詳細な検討がなされ、この地域における縄文時代中期末葉の文化を解明する糸口がつかめるものと思われる。



1. 遺跡遠景（南より）



2. 遺跡遠景（東より）

3. W-19区西壁



4. U-18区西壁



5. W-19区南壁





6. U-18区第7文化層
石器出土状況



7. U-18区第7文化層No.2
石器出土状況



8. W-19区第7文化層No.6、8
石器出土状況

9. V-18区第1文化層
石器出土状況



10. N-21住居跡全景
(南東より)



11. N-21住居跡遺物出土状況 (南東より)

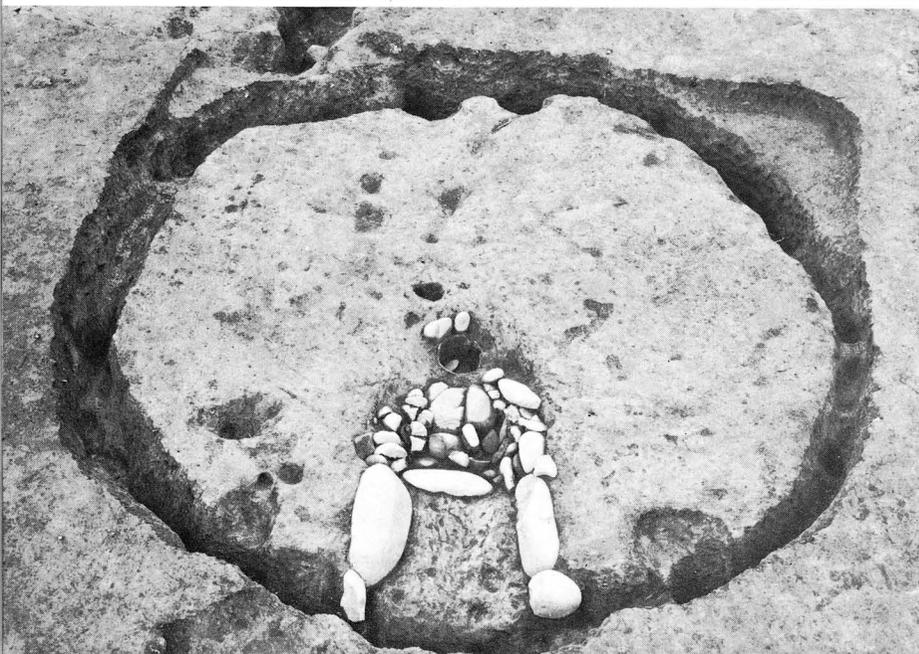




12. N-21住居跡炉断面



13. N-21住居跡炉
(南東より)



14. O-24住居跡全景
(南より)

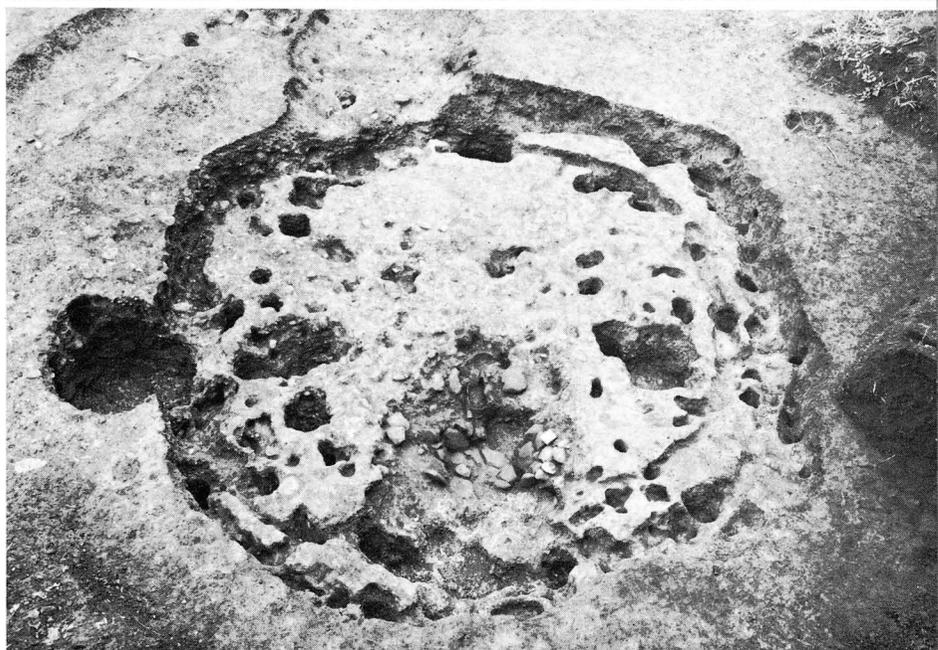
15. O-24住居跡炉
(南より)



16. O-24住居跡炭化物
出土状況 (東より)



17. M-30住居跡全景
(南東より)





18. L-25住居跡全景
(南東より)



19. P-26住居跡炉
(東より)



20. M-21住居跡遺物出
土状況 (東より)

21. P-21d土壙全景
(北より)



22. I-24土壙セクション
(東より)



23. J-26a土壙全景
(南より)

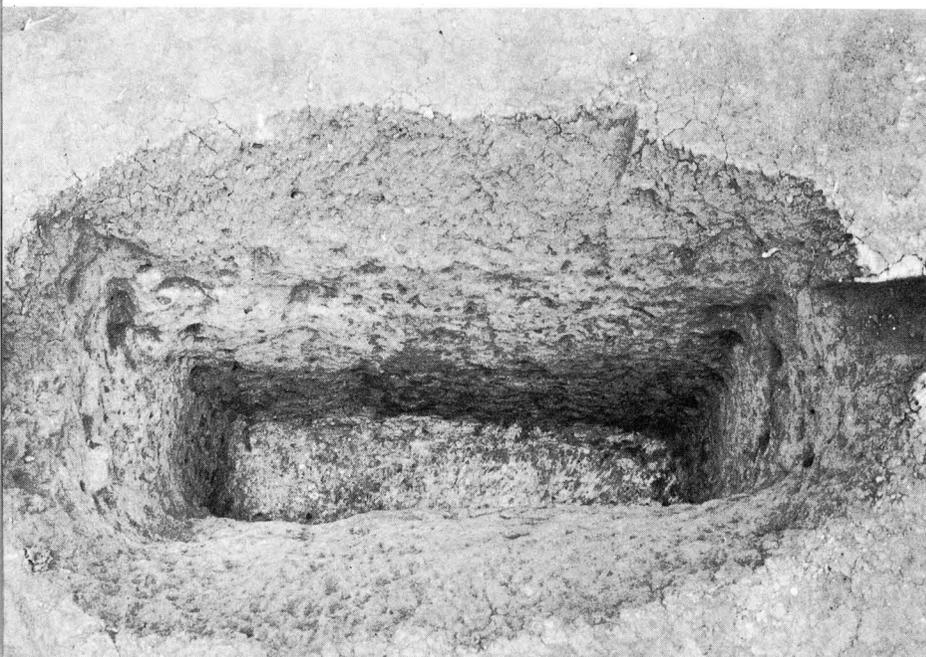




24. J-24d 土壙全景
(南より)



25. X-22a 土壙全景
(北より)



26. S-18a 土壙全景
(南より)

27. N-26 a 土壇全景
(南より)



28. O-29 c 土壇全景
(南より)

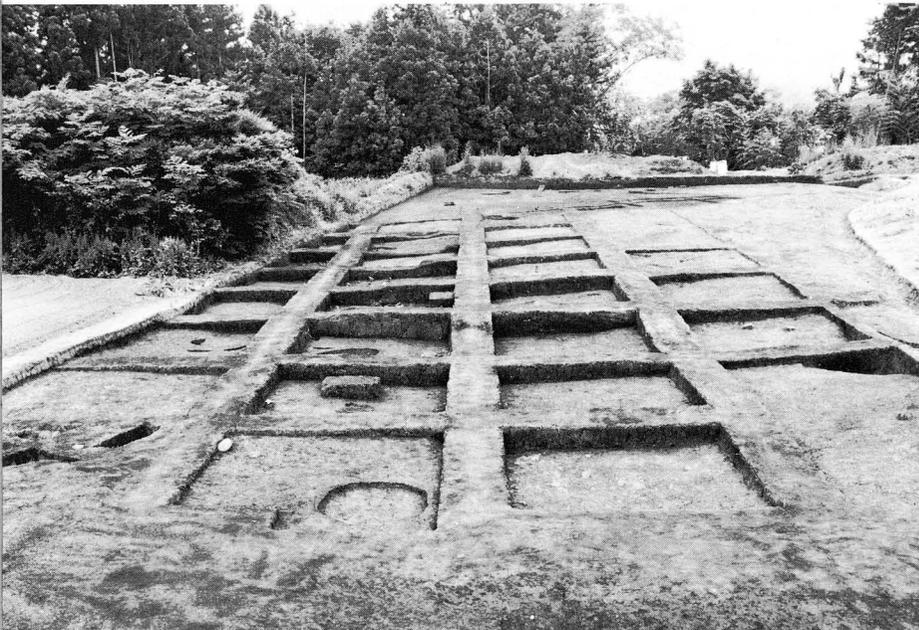


29. T-32 住居跡全景
(西より)





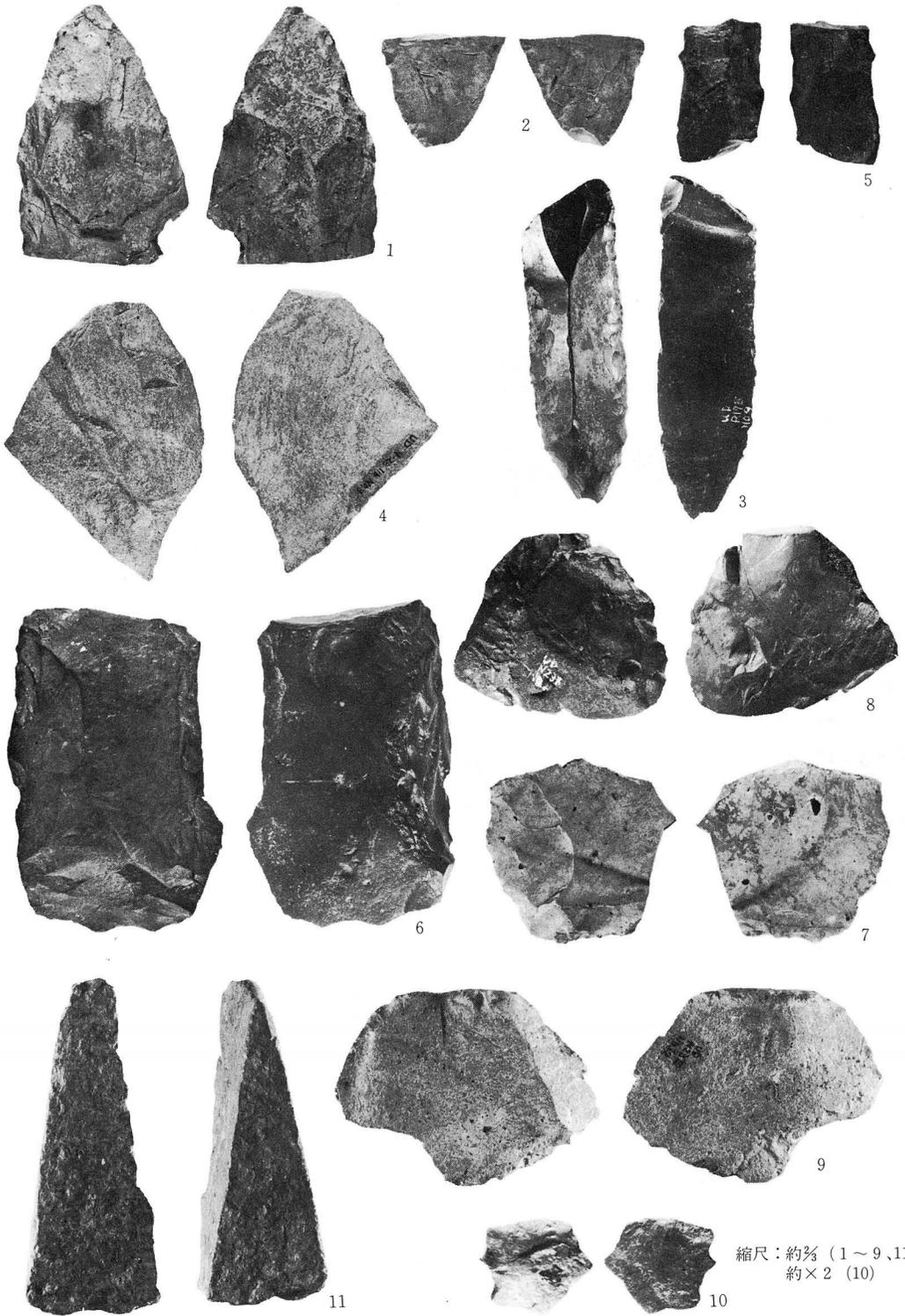
30. L-25 a 土壤全景
(西より)



31. 東区谷部包含層
(西より)

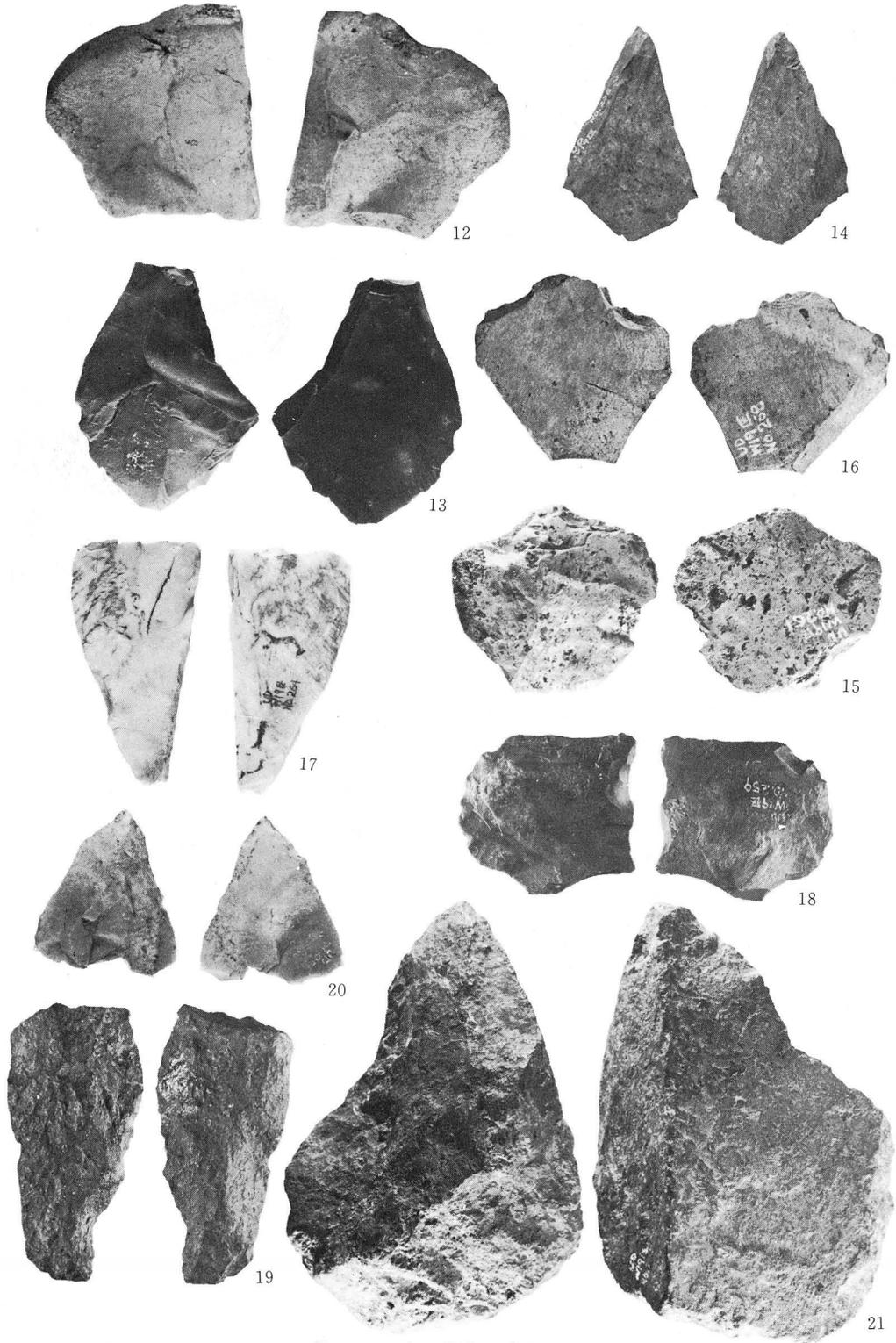


32. 東側道路部発掘状況
(東より)



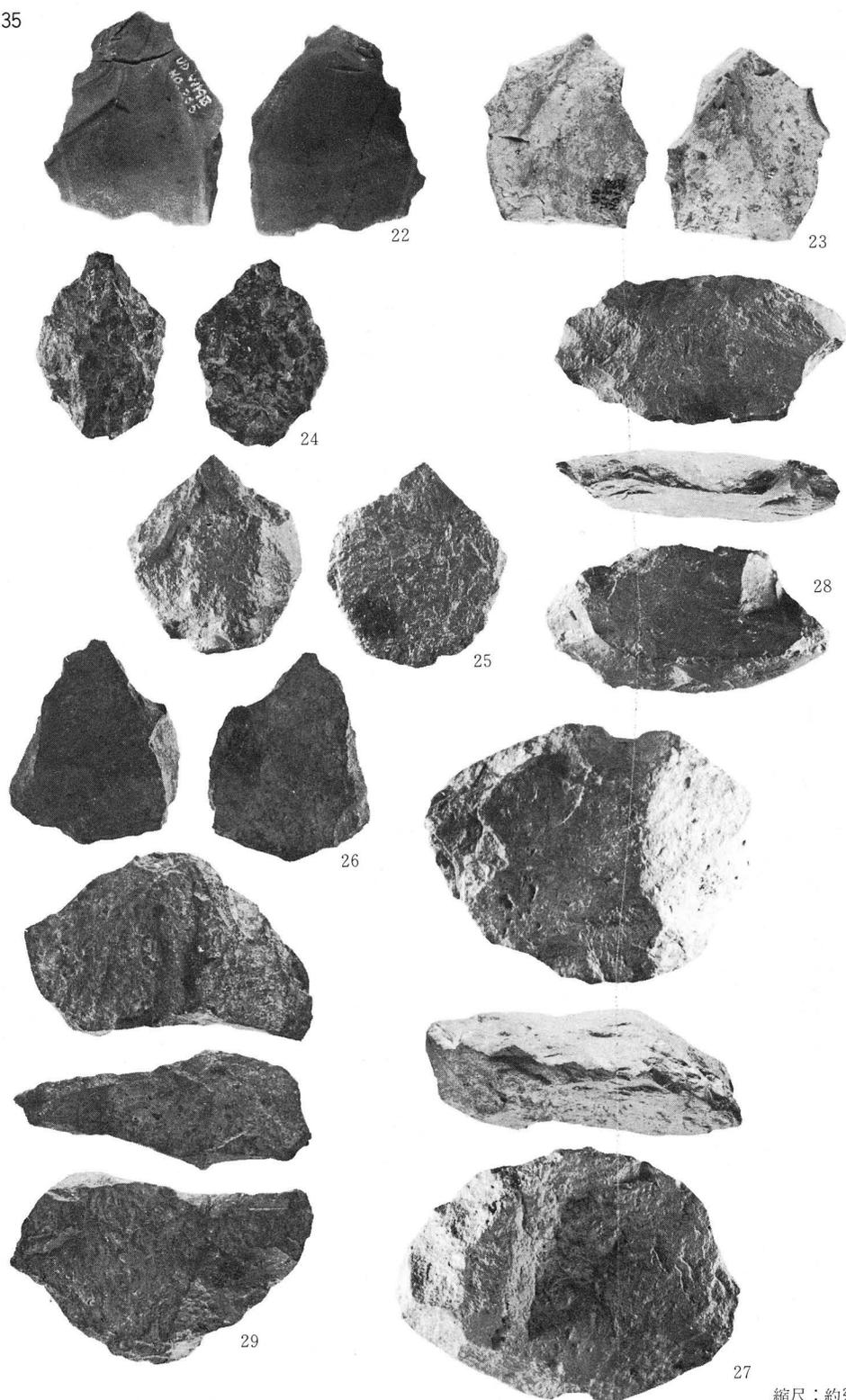
縮尺：約 $\frac{1}{2}$ (1~9, 11)
約 $\times 2$ (10)

第5・6・7・8・9・21層上面出土石器



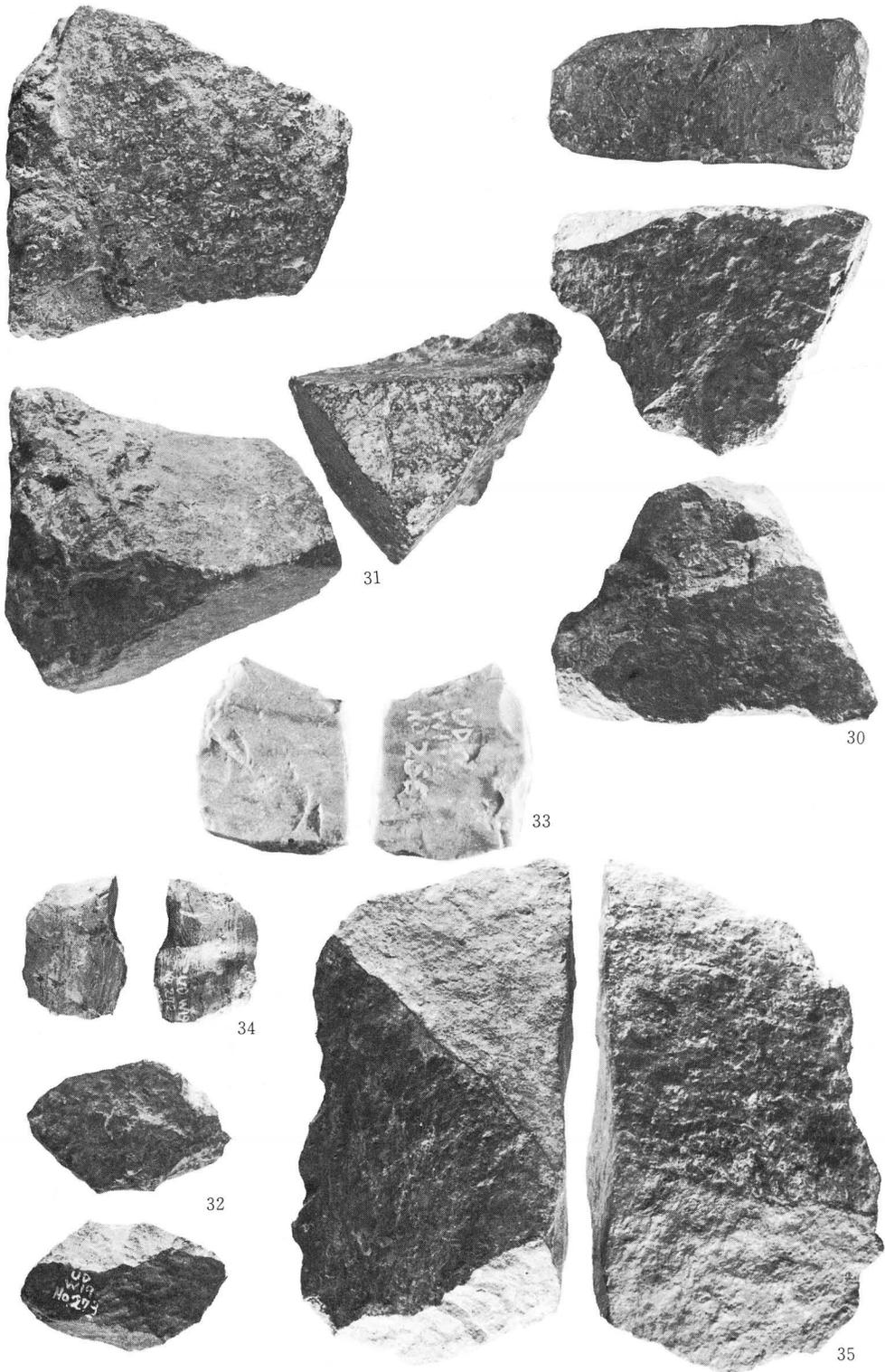
第21・22・23・24層上面出土石器

縮尺：約 $\frac{1}{2}$

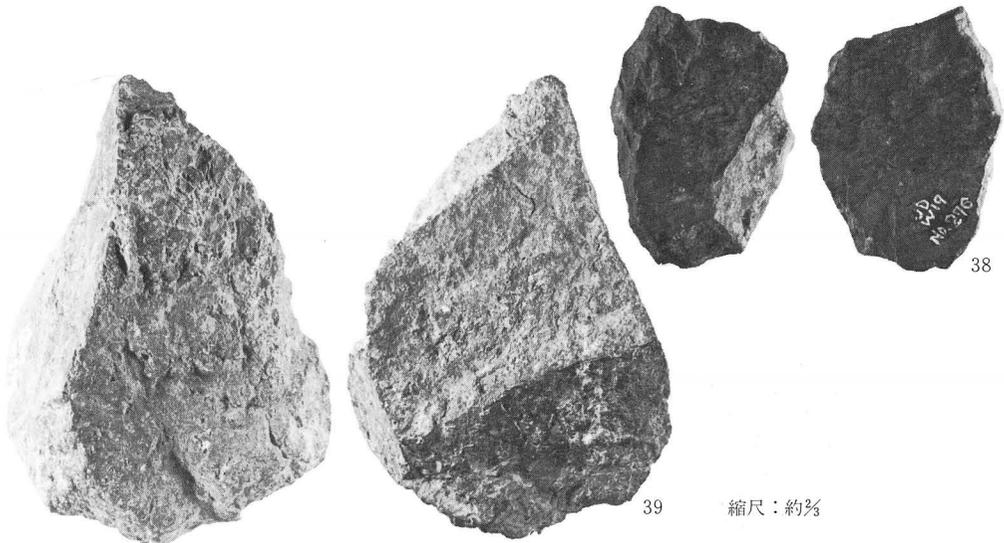
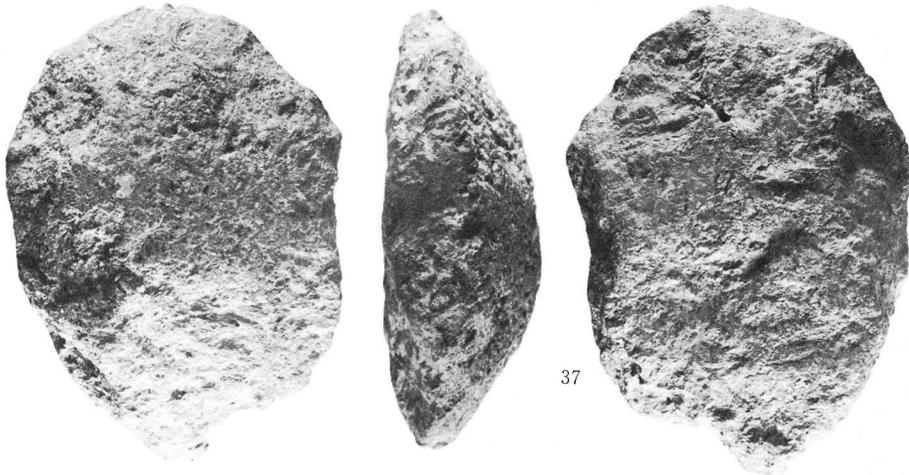


第21層中・第24・21-27間層上面出土石器

縮尺：約 $\frac{2}{3}$



第21—27間層・第27層上面出土石器 縮尺：約 $\frac{1}{2}$ (30、31、32、34、35)
約 $\times 2$ (33)



縮尺：約 $\frac{1}{2}$

第29層上面・第31層中出土石器



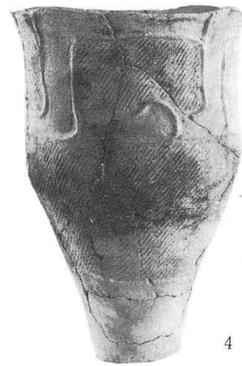
1



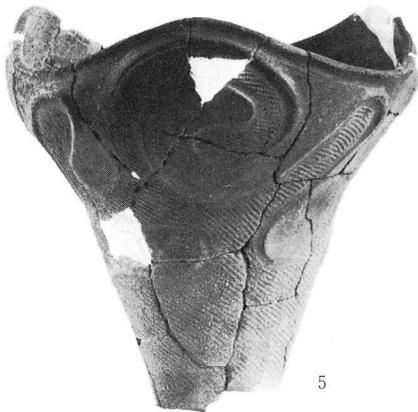
2



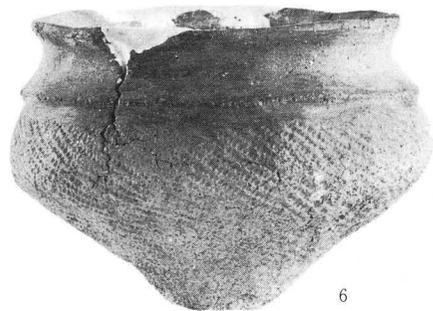
3



4



5



6



7

- 1 谷部包含層
- 2 I-24住居跡
- 3・6 N-21住居跡
- 4 M-30住居跡
- 5 東区西側包含層
- 7 M-21住居跡

出土縄文土器



1



2



3



4



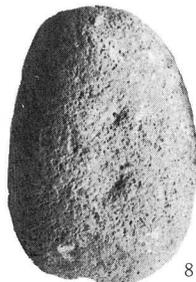
5



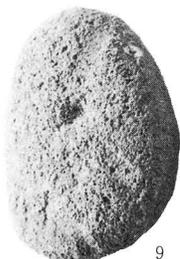
6



7



8



9

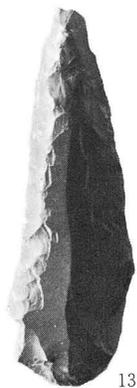
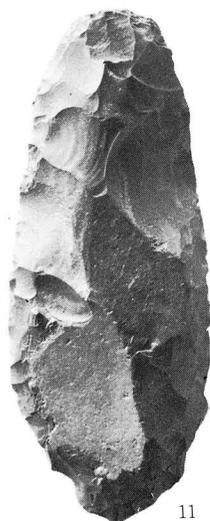
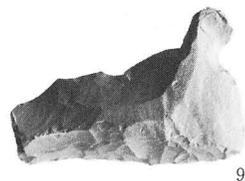
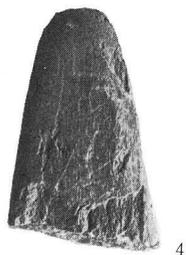
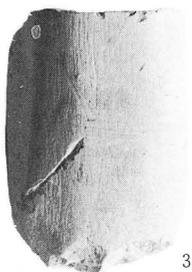
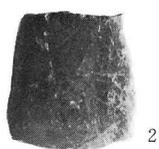


10

- 1 S-18 a 土城
- 2・3・6 東区西側包含層
- 5 谷部包含層
- 7 S-24 a 土城
- 4・8~10 表採

出土縄文土器・土製品・石器

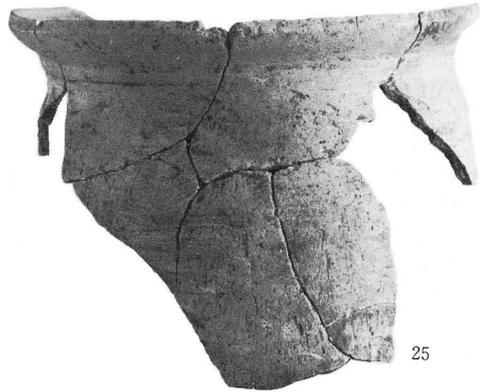
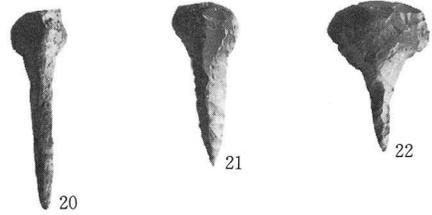
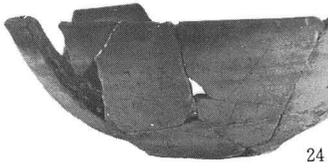
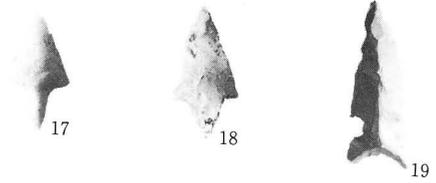
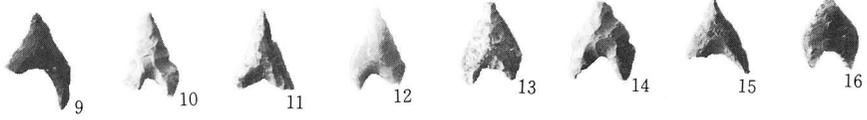
图版40



- 1 M-30住居跡
2~4 東区西側包含層
5 S-18a土壌
6~13

出土石器

図版41



1~22 東区西側包含層
 23~25 T-32住居跡
 26 F-1墓 塚

出土石器・土師器・柄鏡

職 員 録

社会教育課

課	長	永	野	昌	一
主	幹	早	坂	春	一

文化財管理係

係	長	鈴	木	昭三	郎
主	査	鈴	木	高	文
主	事	山	口		宏
	〃	渡	辺	洋	一

文化財調査係

係	長(兼)	早	坂	春	一
教	諭	加	藤	正	範
主	事	田	中	則	和
	〃	結	城	慎	一
	〃	柳	沢	みどり	
教	諭	青	沼	一	民
主	事	木	村	浩	二
	〃	篠	原	信	彦
	〃	佐	藤		洋
	〃	金	森	安	孝
	〃	佐	藤	甲	二
	〃	工	藤	哲	司
	〃	渡	部	弘	美
	〃	主	浜	光	朗
	〃	斎	野	裕	彦
	〃	吉	岡	恭	平

(56.1.1 採用)

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集 仙 台 城（昭和42年3月）
第3集 仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和35年3月）
第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
第5集 仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集 仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集 仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集 仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集 南小泉遺跡一範圍確認調査報告書一（昭和53年3月）
第14集 栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
第17集 北屋敷遺跡（昭和54年3月）
第18集 柗江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
第21集 仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅰ（昭和55年3月）
第22集 経ヶ峯（昭和55年3月）
第23集 年報 1（昭和55年3月）
第24集 今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
第25集 三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
第27集 史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
第28集 年報 2（昭和56年3月）
第29集 郡山遺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
第30集 山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）

仙台市文化財調査報告書第30集

昭和55年度

山田上ノ台発掘調査概報

昭和56年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 631166(代)

